

平成14年度

大阪市内埋蔵文化財包蔵地  
発掘調査報告書

2004. 3

大阪市教育委員会  
(財)大阪市文化財協会

## 例　　言

1. 本報告書は平成14年度の国庫補助事業による  
大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めました  
のである。
2. これらの調査は大阪市教育委員会が助大阪市  
文化財協会に委託して実施したものである。
3. 本報告書の執筆は助大阪市文化財協会 京鳩  
覚の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。  
その氏名は各報告に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保  
護課において行った。

## 目 次

### I 北 区

同心町遺跡B地点発掘調査（D C02-3）報告書	3
--------------------------	---

### II 中 央 区

雞波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW02-5）報告書	15
雞波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW02-10）報告書	21
雞波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW02-11）報告書	25
雞波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW02-13）報告書	27
上木町北遺跡発掘調査（UN02-5）報告書	33

### III 天王寺区

上本町南遺跡発掘調査（U S02-1）報告書	43
伶人町遺跡・茶臼山古墳発掘調査（R J02-4）報告書	45

### IV 東淀川区

崇禪寺遺跡発掘調査（S Z02-1）報告書	51
-----------------------	----

### V 旭 区

森小路遺跡発掘調査（M S02-5）報告書	57
-----------------------	----

### VI 阿倍野区

阿倍野筋南遺跡発掘調査（A S02-2）報告書	65
-------------------------	----

### VII 西 成 区

岸ノ里遺跡発掘調査（K S02-3）報告書	71
-----------------------	----

# I 北区

## 同心町遺跡B地点発掘調査(DC02-3)報告書

- ・調査個所 大阪市北区天満橋2丁目2・3・4・5-1~5-4・9-3・13-40・82
- ・調査面積 80m<sup>2</sup>
- ・調査期間 平成14年12月18日~平成15年1月11日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚、趙哲済、松本啓子、小倉徹也

### 〈調査に至る経緯と経過〉

同心町遺跡は1996年に北区同心2丁目で発見された弥生時代の遺跡である。建設省国土地理院(1965)の土地条件図によれば、上町台地に沿って伸びた長柄砂州(天満砂堆ともいう)に位置する。長柄砂州は縄文時代中期に伸び始め、弥生時代中後期には東淀川区の崇禪寺遺跡が立地するまでに発達していたという(梶山ほか1986)。また、同心町遺跡の南には豊臣秀吉により移された天満本願寺の有力な推定地があり、発掘により豊臣期以降の大坂城下町の変遷が明らかとなっている。また、遺跡近くの大川右岸には、江戸時代から昭和初期まで続いたといいう源八渡し跡があるなど、歴史時代を通じてさまざまな人間活動の足跡が残る地域である(図1)。

2002年12月3日に遺跡発見地から北へ約400mの敷地で計画された標題の建設工事に先立って、建設者の協力を得て6箇所を試掘調査したところ、1箇所で地表下約3mに弥生時代中期の土



図1 調査地位置図



図2 調査範囲位置図

器包含層が見つかった。当該地は同心町遺跡の範囲外であったが、協議の結果、同心町遺跡B地点と呼んで本調査を実施することになった。

調査箇所は標高3.6m前後の平坦な造成地である。緊急調査であったために基準点測量は実施できなかったが、後日、調査場所を復元できるように建築建物の基礎位置に沿って調査範囲を設定した(図2)。また、試掘調査で弥生土器が見つかった地点を取り込んだ約80m<sup>2</sup>を調査範囲としたが、弥生時代の遺物包含層の分布深度が地表下約3mと深かったため、壁面の安全性を高めるために重機による掘削範囲はひと回り大きな範囲で行い法面の傾斜を確保した。人力による精査は年末・年始の休止期間を挟んで12日間実施し、弥生時代以降の遺構を検出するとともに多数の遺物を得た。

#### 〈調査の結果〉

##### 1. 層序

本調査地の地層は、近・現代盛土を第0層として、その下位を第1層から第13層に区分できる(図3・4)。第11層以上にはことごとく弥生土器が含まれていた。

第1層は下位層を大きく掘り込んだ穴を埋め立てた盛土層であり、肥前京焼陶器、肥前磁器、備前播鉢、堺播鉢、焼塩壺、瓦ほかを多量に含んでいた(図3の南壁側には分布しなかった)。

第2層はややシルト質の砂を主体とし、礫、下位層の堆積物偽疊が混じる盛土層であった。後述する第13層に達するまで大きく掘り込まれた穴SX01上部に、南壁側では見かけ上東から西へ、北壁側では西から東に堆積物が供給されていた。

第3層は調査地東部の第3層上部と、西部の第3層下部に区分した。第3層上部は層内下半部に多数の畝間が認められた畠作土層であった。上半部はやや泥質で塊状であり、水田作土であった可能性がある。第3層下部は、第2層と同様にややシルト質の砂を主体とし、礫、下位層の堆積物偽疊が混る盛土層であり、第13層に達するまで大きく掘り込まれた穴SX01下部に、南壁側では見かけ上東から西へ堆積物が供給されていた。SX01の東壁面では雨水で流されたと思われる淘汰の良い粗粒砂がラミナ構造をもって堆積していた。

第4層～第12層は、第3層上部の下位に焼されずに残っていた。第4層から第6層は連続して堆積した洪水時の河成層であった。第4層はシルト質砂からなり、平行葉理とトラフ型斜交葉理が認められる河成の堆積層であった。比較的細粒な上限近くには酸化鉄の集積とマンガン斑紋が認められた。

地層区分	岩相	層相変化・構造等の特徴	層厚(cm)	測量	時代	遺物(実測番号)
第0層	(盛土)	—	55cm		近・現代	
第1層	含鉄粘土シルト質砂層(盛土)	不整然な滑利の互層	av.50		近洪後期	1号(34)
第2層	理・理層混じり黄褐色シルト質砂(盛土)	不整然な滑利の互層	150cm	SX01上部		SX01上層(11)
第3層	上部 黄褐色細粒質シルト(作土)	疏開層結構の互層	max.45	高		
	下部 厚・理層混じり黄褐色シルト質砂(盛土・淤泥堆積)	不整然な滑利の互層	60cm	SX01下部		SX01下層(29)
第4層	黄褐色シルト質砂(河成)	平行葉理・トラフ型斜交葉理	av.20			
第5層	ナリーブ動物層(淡水堆積)	逆級化	18cm			
第6層	a 黄褐色土質シルト(河成)	平行葉理	8cm	水田 SK01 SD00-01	中・古	6-10号(25) 7号(27), 20, 33, 35 7号(28) 7-10号(29) SD00-01
	b 褐色砂質シルト(SD0-2近傍層)	塊状	av.5			
第7層	暗褐色砂質シルト(SD0-2近傍層)	塊状	10-25	SD02 SK02 SK04	古・真	SD00-07 SD02-01, 3, 36 9号(32)
	河成色泥偽層・黄褐色シルト質砂(河成)	塊状(盛土・淤泥堆積)	15cm	SK03 SD03		
第8層	灰褐色・褐色層混じり砂質層・泥質層(作土?)	塊状	10-25	SK04	古生中期	10号(8), 14(21) SK04(2, 4, 5, 9, 10, 11, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 24)
第9層	上部 沈積シルト質砂(古土壤)	20cm				SK00(3, 12, 13, 22)
	下部 黄褐色シルト質砂(古土壤)	10-15				
第10層	直角埋没ヒリテ	10-15				
第11層	にせい表皮色無相接~中段赤(河成)	トラフ型斜交葉理	27cm			
第12層	或青灰色シルト質砂層(底水流?)	上方細粒化・板状	70cm			

図3 DC02-3 調査地の層序

第5層は極粗粒砂と細礫～中礫からなり逆級化構造が認められた。第6層は平行葉理が認められるシルト質細粒砂層であった。これらの累重関係は洪水の増水時から減水時の状況を示している。第6層からは弥生土器や土師器に混じって瓦器碗の破片が出土した。

第7a層は砂混りの粘土質シルトからなり、堆積構造が認められない塊状で、農具によるとみられる加工痕が明瞭であった。水田作土層と推定される。第7a層の下位で溝SD02の底付近および周辺に分布し、第7a層に比較して暗色が強い薄層を第7b層とした。瓦器碗の破片が出土した。

第8層は下位層の堆積物偽層からなる盛土およびSD04への斜面崩落物からなった。本層か直下の第9層から須恵器が出土している。

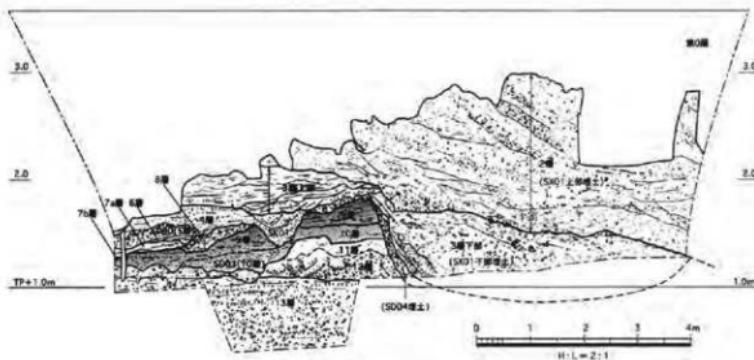
第9層は礁混り砂質泥～泥質砂礁からなる堆積構造が認められない分級の悪い塊状の暗色帯であった。下限は調査地中央～西部の分布高所では明瞭であるが、調査地東部では下位層との境界は不明瞭であった。畠の作土層であった可能性がある。

第10層～第12層は全体として上方細粒化した。第10層はSD03の埋土である第10層上部と、分級の悪い古土壤の第10層下部とに区分できた。庄内期古相の甕をはじめとして6式土師器が出土している。

第11層は第10層下部の下位に分布する細礫混じ砂層であったが、顯著な堆積構造は認められなかつた。弥生時代中期～後期の遺物を含んでいる。

第12層は河成の砂層であり、わずかに細礫を含んだ。トラフ型斜交葉理が認められ、その古流向はほぼ北から南へであった。

第13層は砂礫層であり、礫は中礫が主体であった。観察した範囲では上方細粒化し、上限付近が脱



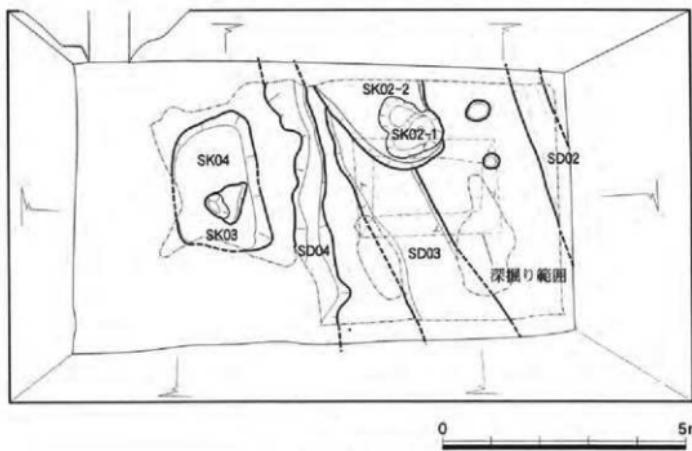
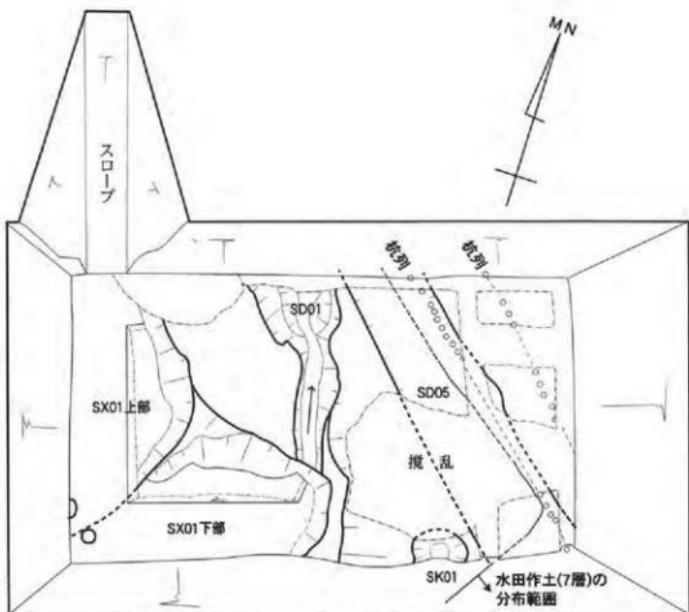


図5 遺構平面図

上：第7層上面以上、下：第8層上面以下

路の方向とは一致しないが、第1層のある面から打ち込まれた杭列も同様の方向であること、また、後述するように下位の遺構の伸びの多くがこの方向に平行しており、過去においては当該土地の区画方向であったと考えられる。第4層上面で検出したSX01下部も穴の規模や埋め方が類似することから、SX01上部と同様な遺構であったと推定される。

SD05・01、SK01は第6層上面の遺構である。SD05は北西—南東方向で幅1.6m前後、SD01は北北西—南南東方向で幅0.6~1.6m、深さ0.4m前後であり、北壁で二股に分かれる可能性がある。これを埋める第4層の古流向は南から北へであった。SK01は長径1.2m、短径0.6m以上、深さ0.3m程度の土壇である。いずれの遺構も第6~4層の洪水堆積層で埋まっており、第6・5層が埋めるSD05が氾濫の主流路であったと推定される。SK01からは瓦器軸の破片が出土した。

SD02は8層上面の北西—南東方向の溝であり、幅0.7m前後、深さは0.1m未満であった。第7b層で埋まっていた。

SD04とSK02は第9層上面の遺構である。SD04はSD01の直下で検出した北北西—南南東方向の溝であり、幅0.8m前後、深さは0.1~0.8mで、北から南へ傾斜していた。SK02はSD05の直下で検出した不整形の穴であり、長径2.5m以上、短径1.8m前後、深さは0.1m未満であったが、底にはさらに深い部分(SK02-1)があった。土師器羽釜などの破片が出土した。

SD04とSK03は第10層上部下面で検出した遺構である。SD03は北東—南西方向の幅1.4~1.7m、最大深さ0.4mの溝である。土師器が出土した。SK03は平面が隅丸の三角形を呈する土壇であり、各辺は0.7~1.0m程度であった。完形に近い古式土師器古相段階の甕が出土しており、土器棺墓であった可能性があるが、詳細な検討は今後の課題である(写真下)。

SK04は第11層の上面で検出した土壇であり、長径2.8m前後、短径1.8m前後、深さが約0.4mで、平面形が隅丸方形の土壇である。埋土は下部約20cmが黒褐色粗粒砂質シルト層、上部は砂礫であり、著しい生物擾乱が認められた。II~V様式の弥生土器の破片が多数出土したが、弥生時代後期に掘られたものと考えられる。

## 2) 遺物

主な出土遺物を図6・7に示す。出土層準および遺構の詳細は図3を参照されたい。

1~21・23・24は弥生土器である。壺1・2・4・9・10・11、鉢15、甕16~20はSK01から出土したものである。壺6・8、鉢14、甕21は第10層から出土したものである。22は庄内式土器古相併行期の甕でSK03から出土したものである。25~31は土師器である。甕32は第9層から出土した奈良時代ごろのものである。33~36は須恵器である。その他、遺離資料ではあるが、蠟を表現したと思われる線刻画が弥生土器IV様式の壺11の肩部に見つかった。また、石斧、砂岩製磨石、二次加工のあるサヌカイト、被熱した片麻岩などの石器・石製品類も出土している。

### 〈長柄砂州に関する考察〉

長柄砂州が弥生時代中期には崇禪寺遺跡が立地するまでに発達したとする従来の見解に対して、当協会が崇禪寺遺跡・三宝寺跡伝承地で行った古流向の調査結果からは、淀川デルタの発達が相当早く、

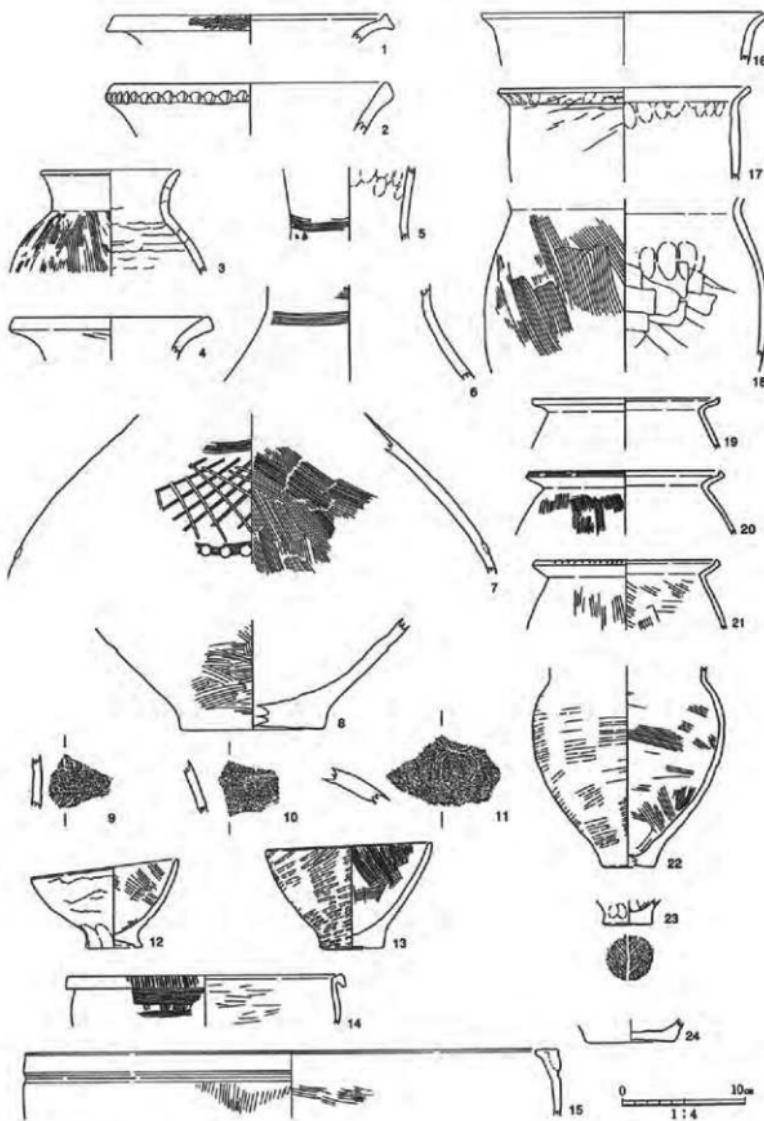


図6 遺物実測図(その1)

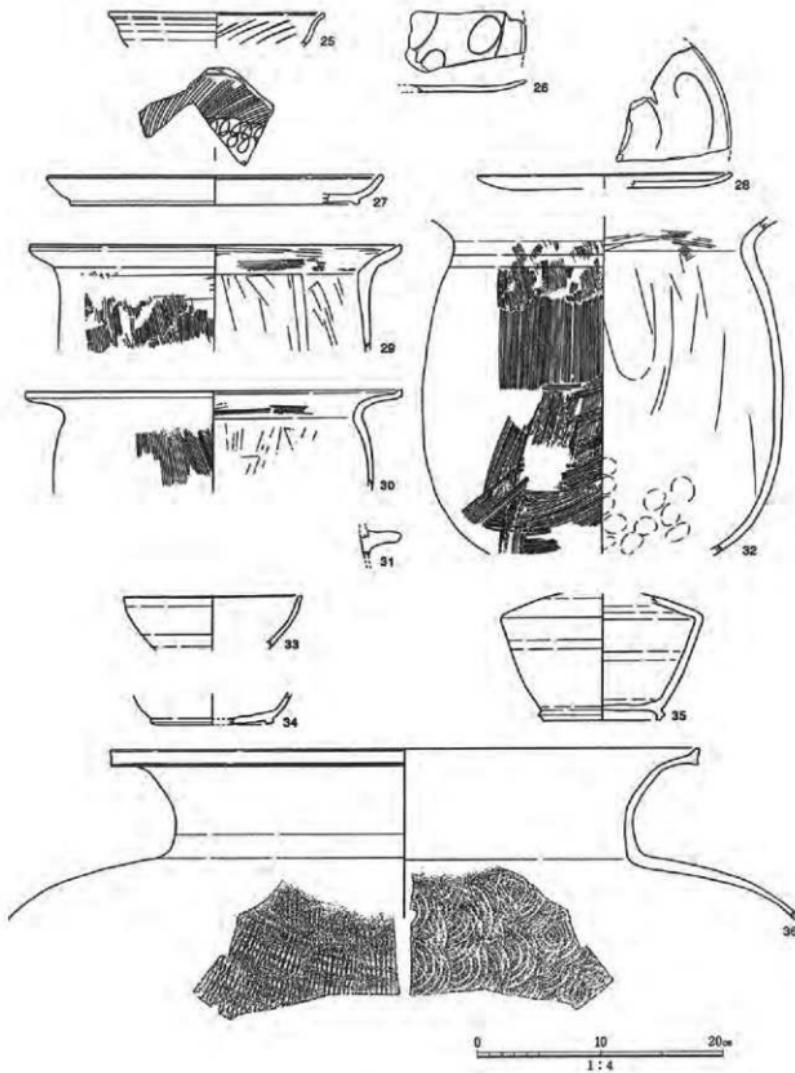


図7 遺物実測図（その2）

崇禪寺遺跡は長柄砂州ではなく、大限島と呼ばれた淀川デルタに立地した可能性があることが指摘されている(SZ01－4次調査)。

今回の調査地では、弥生時代中期の基盤層となった第12層の古流向は、ほぼ北から南へであった。この方向は旧淀川の本流であった現在の大川の流れと調和的であるが、長柄砂州が伸びたとされる向きとは逆方向である。一方、第13層の礫に淀川水系にはふつうに認められるホルンフェルスが含まれなかつたことから、第13層は旧大和川水系からもたらされた可能性が高い。したがって、当該地は淀川の流れと大和川の流れとが複合して形成された可能性があり、当該地の成立過程については、今後さらに検討していく必要がある。

#### 〈まとめ〉

本調査において、次の諸点が明らかになった。

- 1) 当該地は弥生時代中期以降の遺跡として認知される。ことに多数の遺構や遺物からは、本遺跡が崇禪寺遺跡に匹敵する遺跡であった可能性がある。
  - 2) 当該地における人間活動は弥生時代中期に始まるが、弥生時代後期以降に土地利用が活発になつたことにより相当な改変を受け、断片化している。
  - 3) 当該地が造成される以前の北東－南西方向の土地区画は、SD03に見るように、古墳時代にまで遡る可能性がある。
  - 4) 当該地の成立過程を復元するための古流向・礫種の基礎資料を蓄積した。
- また、次の課題が新たに生じた。
- 5) 遺構を広く把握し、遺跡の性格を解明すること。
  - 6) 土地の成立過程を復元すること。

遺構検出状況  
(北から)



地層の断面  
(南壁)



土器出土状況  
(SK03付近)



## II 中 央 区

## 難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW02-5)報告書

- ・調査個所 大阪市中央区安堂寺町1丁目29-3
- ・調査面積 27m<sup>2</sup>
- ・調査期間 平成14年7月11日・平成14年7月15日～平成14年7月19日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覺・松本啓子

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は上町台地の尾根筋近くの西側斜面に位置し、奈良時代の後期難波宮大極殿から南西約600mのところにある(図1)。調査地の現地表の標高は約20mであるが、100mほど西や北へ行くと急に



図1 本調査地の位置と周辺の調査地

低くなっている。

周辺の調査では古代～近世の遺構・遺物が見つかっており、このうち古代の遺構や遺物は前期・後期の難波宮の外側にあった難波京を考える上で重要な資料である。

本調査地東隣のNW91-3次調査で古代の柱穴が見つかっていたため、本調査地でも地山とみられる地層の上面で古代の遺構の出土が見込まれた。そこで平成14年7月6日に試掘調査を行い、関係各機関の協議を経て本調査を行うことになった。

調査は試掘結果に基づいて地山直上までの地層を重機で除去し、地山上面の遺構を人力で精査した。その成果は図面・写真等で記録した。途中、台風による中断があったが、現地での調査は7月19日に完了し、撤収した。

なお、本調査では方位は磁北、標高はTP値を使用している。

#### 〈調査の結果〉

##### 1. 層序

第1層：地表から約0.8mまでの間は現代整地層および擾乱で、重機により除去した。

第2層：本層上面で近世と古代の遺構を検出した。最上層の第2i層は層厚が約0.3mで、暗赤褐色～暗黄褐色のシルト質粘土に直径5cmほどの花崗岩の風化礫が多く混じる。その下の第2ii層は赤褐色シルト混り粗～細粒砂で、層厚約0.2mである。下位に粗粒砂が堆積し、上位ほど砂粒が細かくなる。その下の第2iii層は黄灰～淡灰褐色の砂混りシルトで、0.5m以上の厚さがある。

第2層から遺物は出土せず、また周辺調査で見られた同様の地層からも遺物は出土していないので、本層以下が地山と考えられる。今回観察したのは第2iii層までである。

##### 2. 遺構と遺物(図2～4)

第2層の地山上面で古代から近世までの時期の柱穴・土壤・溝を検出した(図版上段)。主な遺構は以下のとおりである。

柱穴は7箇所で見つかったが、SP03は時期の異なる2個の柱穴が重なっていると考えられるので、都合8箇分を検出したことになる。柱穴の規模、平面的な位置関係、深さ、埋土などからみて、組合って建物や構成していたと考えられるものがある。

SP03・05は一辺が約0.9mの平面が隅丸方形の柱穴で、もっとも残りの良いところで深さが0.5mである。東隣のNW91-3次調査のSB02と組合って南北2間以上、東西3間の、磁北から東に5°ほど振る掘立柱建物SB01になると考えられる。柱間は平均すると南北1.90m、東西1.85mである。SP03の掘形、SP05の柱抜き取り穴から土師器が出土したが、詳細な時期の判別はできなかった。

SP04は平面隅丸方形の柱穴(図版中段)で、一辺は約0.7m、柱痕跡の直径は0.15mである。柱痕跡から須恵器が、掘形から土師器が出土したが、細片のため時期の詳細は不明である。この柱穴は規模や形状が東隣調査のSB01の柱穴に似ており、位置的にみても、これらの柱と組合う可能性がある。この場合、P6と対の位置になり、P6との柱間距離は5.0mある。擾乱の位置なども考え合わせると、東西方向の側柱列には間にもう一つ柱穴があったものとみられ、東西2間、南北2間以上の掘立柱建

道 路

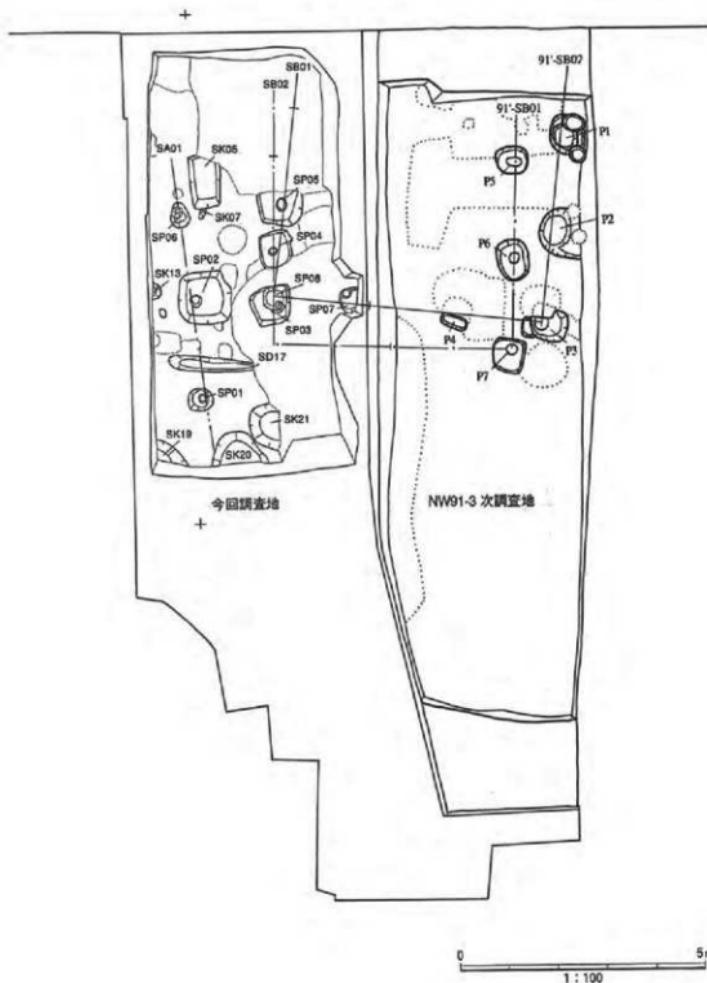


図2 今回の出土遺構と東隣の調査

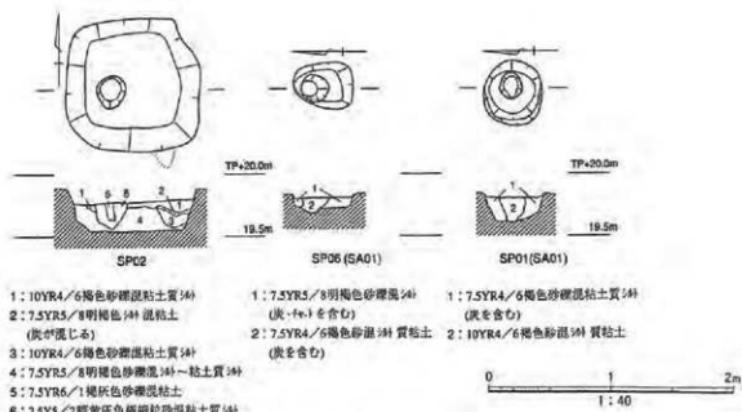
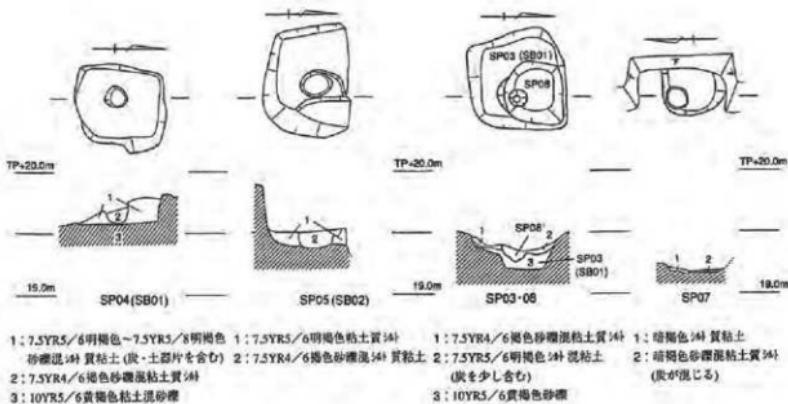


図3 柱穴断面図

物SB02になる。この建物は正南北方向を意識して建てられたとみられ、ほぼ磁北方向を向く。

SP01・06は直径0.5m程度の平面円形の柱穴で、埋土や規模・形状がよく似ているので、組合うものと考えられる(SA01)。深さは残りの良いところでも0.2mである。柱間は3.8mあり、両者の間にもう一つ柱穴があった可能性がある。遺物はSP01の掘形・柱痕跡から土師器が出土したが、時期の判別できるものはない。

SP08とSP07は一辺0.5m程度の平面隅九方形の柱穴で、柱または柱抜取穴の痕跡が見られた。直径0.15mほどである。この2つの柱穴は現状で規模や形状などが似るが、上部が大きく削平され、深

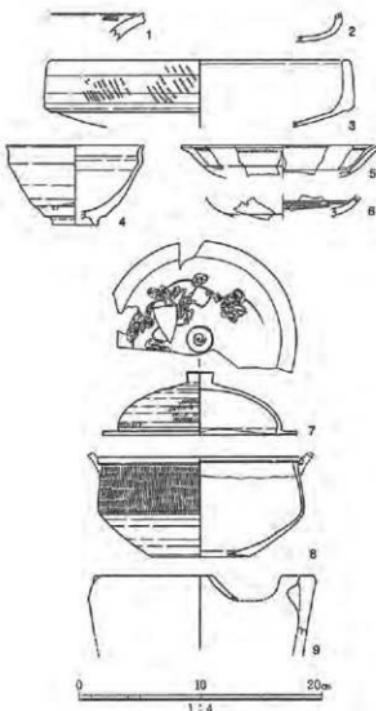


図4 出土した遺物

SP02(1)、SK13(2)、SK20(3)、SK07(4)、SK05(7~9)、第2層上面清掃中(5~6)

師質土器の炮烙の底部2が出土した。底部から角張ることなく丸く立ち上がって口縁部へと続くものとみられ、側面を工具によってなでている。こういった特徴は17世紀代を中心に18世紀前半までの炮烙に見られるものである。

SK20は南壁際で検出した幅1.2m、長さ0.7m以上、深さ0.2mほどの土壌で、南側に延びる。17世紀代の土師質土器炮烙3が出土した。

このほか、破片ではあるが、近世初頭の遺物である中国漳州窯系青花皿5・6が、第2層の地山上面の清掃中に見つかった。

これらのことから、16世紀末～17世紀の豊臣期の大坂城内、徳川期の城下町と想定される本調査地周辺でも人の活動が窺える。

SK05は東西0.75m、南北1.10m、深さ0.25mの長方形の土壌である。18世紀後半以降の遺構である。図4にSK05から出土した国産陶器の土鍋8とその蓋7、瓦質土器火鉢9を図示した。

さが数cmほどしかないので、との形状はよくわからない。このため組合うかどうかは判然としない。両者の柱間距離は約1.5mである。遺物は出土しなかった。

SP02は一辺1.1m程度の平面が隅丸方形の柱穴(図版下段)で、掘形から土師器の甕口縁1が出土した。この検出面と同様の高さの地山が残る南北方向には組合う柱穴がなく、東西に展開する柱列であったと考えられる。

これらの柱穴の詳細な時期は、判別できる遺物が出土していないため、よくわからないが、いくつかは古代に遡るものと考えられる。

このほか、土壤や溝などの遺構を同じ面で検出したが、すべて近世の遺物が出土した。また、当時の地表面は残っていない。これらの遺構のうち、SK03・13・20は16世紀末～17世紀の近世初頭の遺構であるが、他はすべて18世紀後半以降のものである。

SK07はSK05に切られる幅0.3m、長さ0.4m以上、深さ0.1mほどの平面が梢円形をした遺構で、唐津焼の天目碗4が出土した。

SK13は西壁際で見つかった幅0.3m、長さ0.2m以上の遺構で、見つかった部分は半円形で調査区西側へと延びる。深さは0.1mほどである。土

#### 〈まとめ〉

今回の最大の成果は、東隣のNW91-3次調査で検出された柱穴と組合う可能性のある柱穴が見つかり、建物として復元できたことであろう。遺構の年代は明らかにできなかったが、前回の調査でも述べたとおり、今回調査のSB02が正南北方向を意識した建物とみられることや、SB01・02、SP02の柱穴掘形の規模が比較的大きいことなど、7・8世紀に営まれた羅波宮や羅波京の建物や構の柱穴と類似点がみられ、断定するにはいたらないものの、関連性が指摘できよう。

今回のように小規模な調査であっても、得られた情報を周辺の調査の情報と総合して考えることにより、より確かな歴史を解明することができよう。今後の調査も含め、さらなる検討を加えたい。

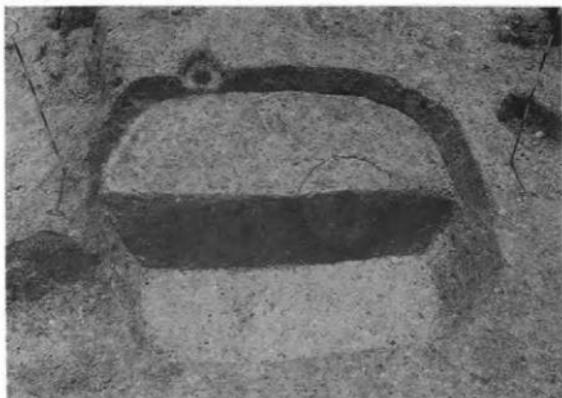
調査地全景  
(東から)



S P04 (東から)



S P02 (北から)



## 難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW02-10)報告書

- ・調査個所 大阪市中央区安堂寺町1丁目44、44-2、44-8
- ・調査面積 25m<sup>2</sup>
- ・調査期間 平成14年10月21日～平成14年10月26日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・藤田幸夫・櫻井久之

### （調査に至る経緯と経過）

調査地は難波宮跡公園の南西400mに位置し（図1）、これまで行った周辺の調査では難波宮の時代や豊臣氏大坂城期の遺構などが検出されている。今年度は隣接地すでに2件の本調査（NW02-5・6次）が実施され、こうした時期の遺構・遺物が確認されている。大阪市教育委員会により、試掘調査が平成14年10月8日に行われ、地表下約0.6mに地山層が検出された。これは周辺調査地での状況と同様であるため、この敷地内においても当該期の遺構が遺存するであろうと予測された。

事業者との協議の結果、3m×10mの範囲の発掘調査を実施することとなり、10月21日より重機による上掘りを始めたが、残土置き場を敷地内に確保するために調査区を狭め、3m×8m強の範囲とした（図2）。翌日より遺構検出作業に入り、江戸時代の大型土壙や柱穴などが確認された。25日までに遺構掘削・記録作業および埋戻しを終え、翌26日に残る撤収作業を行い、現場調査を完了した。



図1 調査位置図

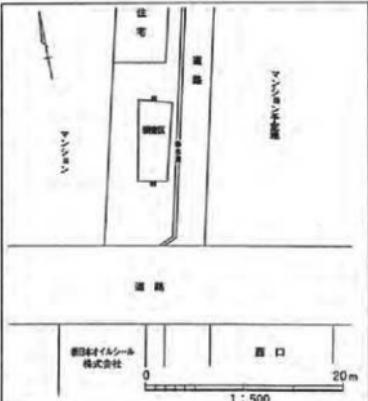


図2 調査区配置図

なお、この調査で使用している水準はTP値である。

#### 〈調査の結果〉

##### 1. 層序（図3）

今回の調査地は狭小であることに加え、多くの擾乱や江戸時代の大型土壙があったことから、生活面となった地層の抜がりを捉えるのは困難であった。しかし、断面観察による第2層上面は固く締まっており、比較的長期間にわたって生活面となっていたものと推測された。調査区北部にある大型土壙SX01・02は第2層上面の遺構であり、他の土壙・ピットの多くも埋土や出土遺物からみて当層上面に含まれるものと思われる。

第0層：現代の盛土層や機乱を受けた範囲である。

第1層：暗褐色（10YR3/3）粘土質シルト層で江戸時代末ころの地層と思われる。本層を掘込んで焼土や炭化物、焼け瓦を多く含む土壙がある。

第2a層：砂礫を含んだ暗褐色（10YR3/3）粘土質シルト層で、整地層と思われる。本層の上面はよく締まっており、生活面として捉えることができる。

第2b層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質粘土～粘土で、一部に中粒砂が集中するところがある。明瞭なラミナは確認していないが、全体に水漬きの状態で堆積したものと思われた。

地山層：上部は中粒砂を部分的に多く含んだ黄褐色（10YR5/6）粘土質シルト層であるが、上部から0.5m以深では均一な極細粒砂層となる。地山層上端の標高はTP+11.5mであった。

##### 2. 遺構と遺物（図3）

今回検出した遺構は、ピット（SP02～13）、土壙（SK01・02、SX01・02）、井戸（SE01）である。出土遺物や埋土から判断して、SP13・SE01を除くその他は第2層上面の遺構と考えられ、江戸時代中～末葉に属すると思われる。SP13は古代にさかのぼる可能性がある。一方、SE01は近現代に埋戻されているが、掘削時期は江戸時代であったとも考えられる。

**ピット** 大半は平面が円形ないし不規則形で、直径0.2～1.0m、深さ0.1～0.3mであったが、SP02は深く0.6mあった。SP01～03からは鉛滓が出土した。SP09・10は方形プランをもち、前者は一辺0.4m、深さ0.6mで、直径10cmの柱痕跡が明瞭に見られ、後者は一辺0.7m、深さ0.4mあった。不整形なプランのSP13は、掘形の底部分がかろうじて残存したものと思われる。褐（10YR4/6）～暗褐色（10YR3/3）シルト質粘土を埋土とし、須恵器表裏部の小片が出土した。

**土壙** 小型のSK01・02と共に大型のSX01・02がある。SK01はSX01の埋土を掘込んでおり、長径1.3m、短径1.0m、深さ0.5mある。ほぼ完形となる近世の軒平瓦が出土した。SK02は直径1.2mあるが、深さは0.1mほどと浅く、底を平坦に整えている。平瓦や焼け壁などが出土したが、遺物は少量である。SX01は調査区北端にある大型の土壙で、西端でSX02の一部を切っている。SX01・02についてでは遺構の全体を検出することはできなかったが、ともに1m以上の深さがあり、南肩部を階段状に造作していた。地山層中の極細粒砂の採集を目的としたものと思われる。遺物には17世紀代の伊万里焼・唐津焼・備前焼・丹波焼などが多く含まれるほか、鉛滓や輪の羽口の出土も目立った。

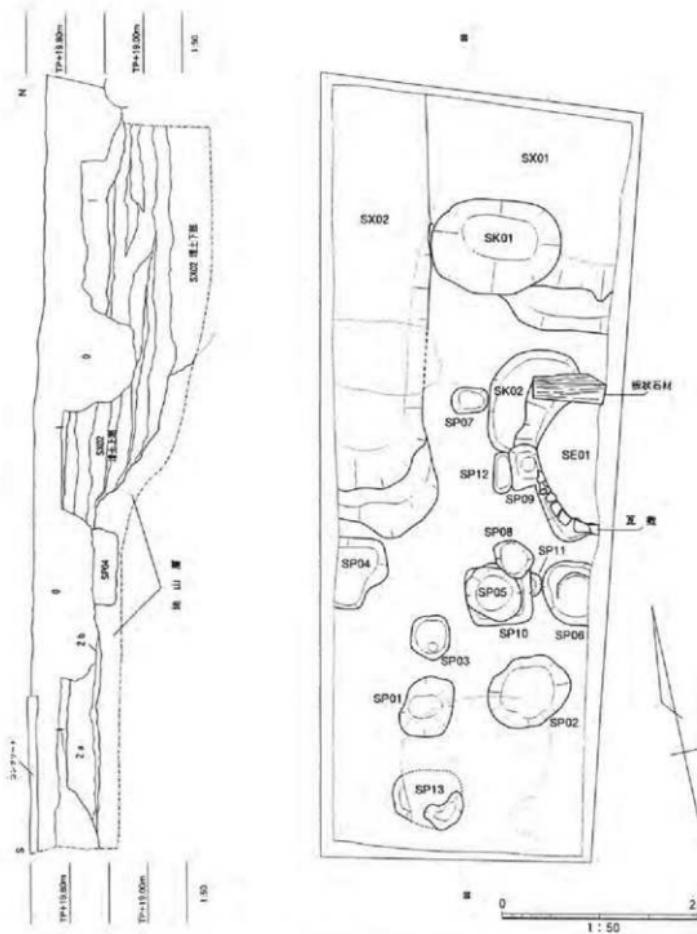


図3 造構平面図および西壁断面

**井戸** 調査区東壁沿いにSE01がある。検出した地山層の直上で直径1.7mあり、その肩から約0.25m下に小割りにした平瓦を円形に並べて段を造っていた。平瓦は北側には巡らされずに、代わりに長さ70cm以上、幅30cm、厚さ10cmの板状の石が設置されていた。これは井桁を受けるためのものであろう。井戸の内側は円形に整形されており、本来は井戸瓦が組上げられていたと思われるが、1mほど掘下げた範囲では残存していなかった。この井戸の上部はレンガを含む土砂により埋められていた。

（まとめ）

今回の調査では、江戸時代の造構が中心となり、調査区周辺で多く検出されているような古代の柱穴等については、その痕跡とみられるSP13が確認できたに留まった。これは近世の大型土壙等により、すでに破壊されたためと推測される。一方、それら近世の土壙やピットにみられた鉛津・轆の羽口は、大坂城下の手工業生産を知るうえでの基礎資料となるであろう。

調査地全景  
(左側が北)



調査区南半部  
(南から)



調査区北半部  
(南から)



## 難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW02-11)報告書

- ・調査個所 大阪市中央区馬場町 旧NHK敷地内
- ・調査面積 約370m<sup>2</sup>
- ・調査期間 平成15年3月6日～平成15年3月24日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・李陽浩

### 〈調査に至る経緯と経過〉

中央区法円坂一帯では、1954年から始まった発掘調査によって大きく分けて2時期の宮殿跡が見つかっており、主要な部分は難波宮史跡公園として整備・保存がなされている。このたび、難波宮史跡公園の北方、旧NHK敷地に対する史跡の追加指定を申請するにあたり、遺跡の分布範囲を確認するための試掘調査を実施することとなった(図1)。今回の調査地は前期・後期難波宮の内裏があったとされる場所である。

調査は平成15年3月6日から開始した。旧NHK建物が存在していた範囲は地下室によってそのほとんどが擾乱されており、南部は一部調査がなされている(NW14次調査)。今回対象としたのは敷地北東部の三角形の部分である(図2)。調査区は、調査地を横断する東西約40m、南北約3mのトレチを2つ設置し(1・2区)、他に範囲確認のためのトレチを3つ設置した(3・4・5区)。各トレチとも重機によって表土および近・現代層を掘削し、1区についてはその後人力によって掘削を行い、遺構検出および記録作業を行った。遺構検出は地山上面で行った。発掘調査に関する基本的な作業は3月18日に終了し、3月24日には保護砂による遺跡保護および埋戻しを含むすべての作業を終了した。

なお、本報告で使用した座標は旧来の日本測地系(國土平面直角座標第VI系)で、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)である。

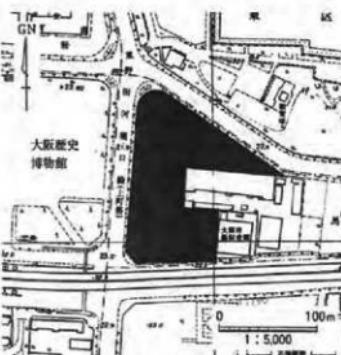


図1 調査位置図

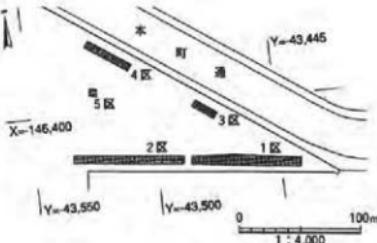


図2 調査区配置図

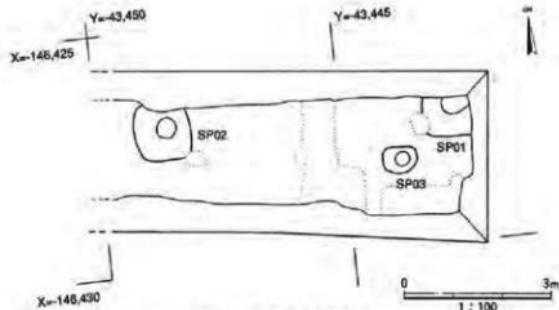


図3 1区東端遺構配置図

#### 〈調査の結果〉

##### 1. 層序

調査区のほぼ全域において、地表下1.6~3.2m以上までが近・現代層によって攪乱されており、とりわけ3・4・5区では地表下3.2mでも地山を確認することができなかった。地山が確認できたのは1区の東部と2区の一部のみであり、比較的残りの良い1区でも地山は砂礫層で、上部がかなり削平されていることが見て取れた。1区ではトレンチ東端から西へ約30mまでの範囲で地山が残存していた。また、地山上面には古代の包含層などは遺存せず、直上には徳川期の地層が堆積する。

##### 2. 遺構と遺物

古代の遺構として、1区東端において柱穴SP01・02・03を検出した(図3)。SP01は南西部のみの検出ではあるが、柱穴の大きさは東西約1.1m、南北約1.1mで柱痕跡は直径0.4m程度と思われる。残存する深さは0.3mほどで、上部がかなり削平されている。SP02は北東隅部分が一部未検出であるが、東西約1.1m、南北約1.2mで柱痕跡は直径0.4mである。SP03は前記2基よりも小規模であり、東西約0.7m、南北約0.55mで柱痕跡は直径0.3mである。SP03の柱痕跡には焼土が多く混入するが、他の二つには顯著に見られない。なおSP01・02間は柱心々間で約5.9mである。これらの柱穴は前期難波宮内裏前殿西妻筋を北方に延長した部分に相当する。今回の調査では上記以外の柱穴は確認されていないが、SP01・03は建物跡に、SP02は南北方向の堀になる可能性が考えられる。近世の遺構としては、1区において土壙・溝・ピットを検出した。出土した遺物から、徳川期のものと思われる。

#### 〈まとめ〉

今回の調査では古代の包含層・盛土などが攪乱のために存在せず、かつ地山自身も相当攪乱されて残っていない部分がほとんどであった。そのような中で、1区の東端において古代の柱穴を検出することができた。部分的な検出のため遺構の性格は不明であるが、他の部分でも地山が残っている範囲ではこのような古代の遺構が残存している可能性がおおいに考えられる。今回の調査地はこれまであまり発掘の進んでいない難波宮の内裏地域に相当しており、今回見つかった柱穴の続きも含めて、より広い範囲における遺構の確認が望まれよう。



調査地全景(北西から)



1区で検出した古代の柱穴(南から)

## 難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW02-13)報告書

- ・調査個所 大阪市中央区法円坂1丁目
- ・調査面積 約655m<sup>2</sup>
- ・調査期間 平成15年3月13日～平成15年3月31日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・積山洋・李陽浩

### 〈調査に至る経緯と経過〉

中央区法円坂一帯では、1954年から始まった発掘調査によって二時期の宮殿跡が見つかっており、主要な部分は難波宮跡公園として整備・保存がなされている。このたび、難波宮跡公園の東方、旧市営住宅敷地に対する史跡の追加指定のための、範囲確認調査を実施することとなった(図1)。この地域では、かつて難波宮の第1～3次発掘調査をはじめとして、30次、38次、40次、NW80-9次、82-10・44次などの調査が行われており、その際に検出された難波宮の遺構との関連も調査の課題となつた。

調査は平成15年3月13日から開始した。調査区を大きく三つに分け(I・II・III区)、さらに各区内においてそれぞれ複数のトレンチを設置した(図2)。各トレンチとも重機によって表土および近・現代層を掘削し、その後人力によって順次掘削を行い、遺構検出および記録作業を行つた。遺構検出はおもに地山上面で行つたが、古代の包含層が存在する部分については遺構保護の観点から一部のみを掘削するに留めた。また調査が終了した地区から順次保護砂による遺構の保護および埋戻しを行い、3月31日には発掘調査に関する基本的な作業をすべて終了した。なお、本報告で使用した座標は旧来の日本測地系(国土平面直角座標第VI系)で、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値:TP+○mと略記する)である。

### 〈調査の結果〉

#### 1. 層序

第0層: 近・現代層である。市営住宅建設に伴う整地土や住宅建設以前の旧基礎などが含まれる。  
第1層: 近世の地層である。I区において最も遺存状態が良く、主に褐色の砂疊であった。層厚は

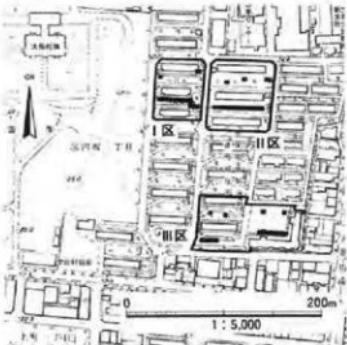


図1 調査位置図

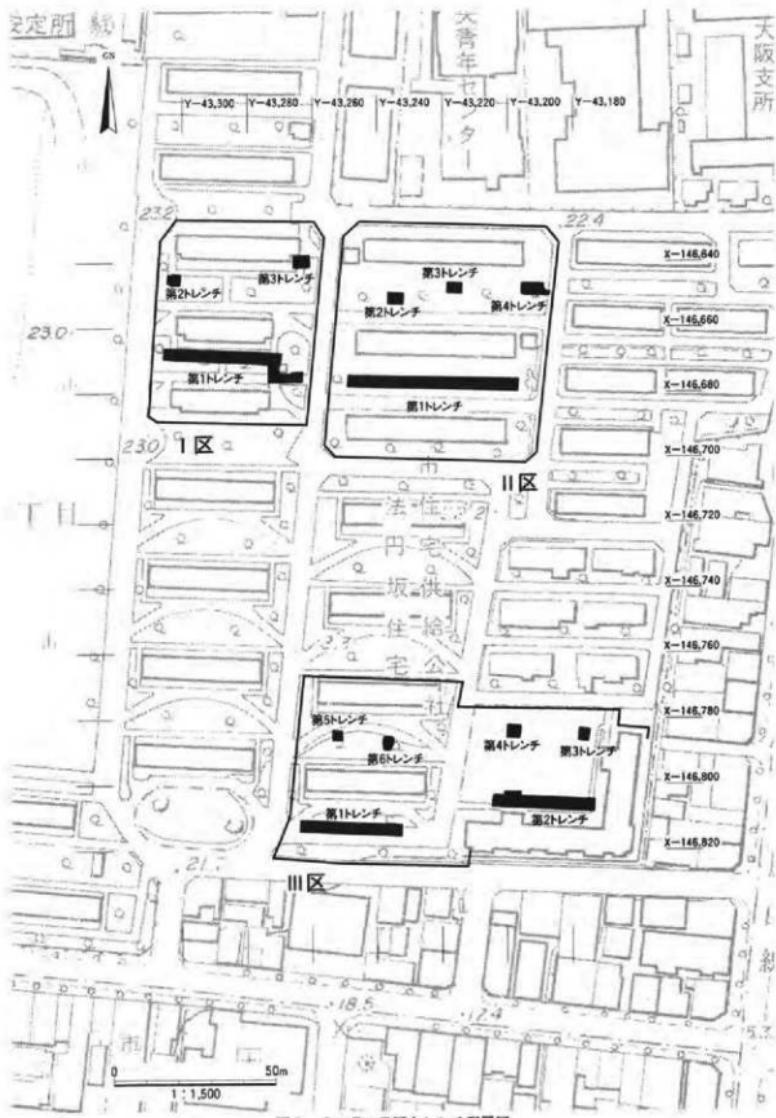


図2 I・II・III区トレーンチ配置図

15~40cmで、本層の下で豊臣期の堀SD01が検出された。

第2層：難波宮の廃絶以後、中世にかけての地層で、I区にのみ分布する。2枚に分かれるが、2a層は褐色～黄褐色の礫混りシルトである。残りの良いI区西半では層厚50cmに及ぶ。I区で過去に実施された第1次調査の「褐色土」、第38次調査の「褐色粘質土」がこれに相当する。瓦器が出土している。2b層は褐色～暗褐色の礫混り粘土質シルトで、第1次調査の「褐色粘質土」、第38次調査の「暗褐色粘質土」がこれにあたる。平均層厚約10cmで、難波宮の瓦を多量に含み、その廃絶後の地層にあたる。

第3層：古代の地層で、I・III区に分布し、かつ大きく2枚に分かれる。3a層は後期難波宮の瓦を含む整地層で、褐色～赤褐色系の粘土・シルト・砂礫などからなる。層厚は10~40cmで、第1次調査の「赤褐色粘質土」、第38次調査の「黄褐色粘質土」に相当する。本層の上面で小石敷が検出された。3b層も整地層で、7世紀前半ごろまでの土器を含み、黄褐色・褐色・暗灰色系の粘土・シルトなどからなる。第1次調査の「灰黒色土」に相当し、さらに2枚に分かれるが、ここでは一括しておく。I区において3b層は西へ行くにつれて深く、かつ厚くなり、西端の第2トレーニングでは80cm以上の厚さに及んでなお、地山に至らなかった。本層の上面で前期難波宮の朝堂院東回廊の柱穴が検出されている。

第4層：地山層である。I区では黄褐色～明黄褐色の砂混りシルトで、西端ではTP+20.5m（現地表下2.5m）まで掘下げても到達せず、小さな谷状の地形となっていることが推測された。東端ではTP+21.4m（現地表下1.1m）で地山が検出され、ほぼ同レベルでII区へと続く。II区では東に向かうとともに褐色～赤褐色砂礫の層相に変わる。直上に古代の包含層が遺存する場合が多いが、すでに相当削平された部分もかなりある。III区では第1・5・6トレーニングで地山が良好に遺存するが、第4トレーニングでは明褐色のシルトを含む極粗粒砂層で、上部が削平されている可能性がある。なおIII区の第2トレーニングでは、西方では地表下約5mで地山を検出したが、東端では地表下約7mでも地山を検出することができず、谷あるいは落込みがある可能性が考えられる。

## 2. 遺構と遺物

調査区が広範囲にわたるため、ここでは区ごとに分けて述べることとする。

### I区

第1トレーニング（図3）では西端で前期難波宮の朝堂院東回廊の柱穴SP01・02が南北に並んで2基見つかった（3b層上面）。このうち、南のSP01は、トレーニングが重複する第38次調査で東西に並んで見つかっていた柱穴2基のうち東側の柱穴で、豊臣期の堀SD01の北斜面に位置する。SP02は今回新たに検出された柱穴で、この位置を朝堂院東回廊が通過することがより明らかになった。その東側では直径2~3cmの小石が散在し、東へ向かって次第に密度を増すことが知られ、さらに本トレーニングの東半では3a層上面で小石敷が検出された。この石敷はSD01やその南側の近世の溝状遺構などによって大きく破壊されていたが、部分的にはかなり良好に残ってトレーニング東端まで連続していた。そのレベルはTP+21.5~21.6mである。因みに後期難波宮大極殿の周囲では、石敷きのレベルはTP+22.3m）。調査はこの3a層上面まで、それ以深は北壁沿いに部分的な小トレーニングを掘削するにとどめ

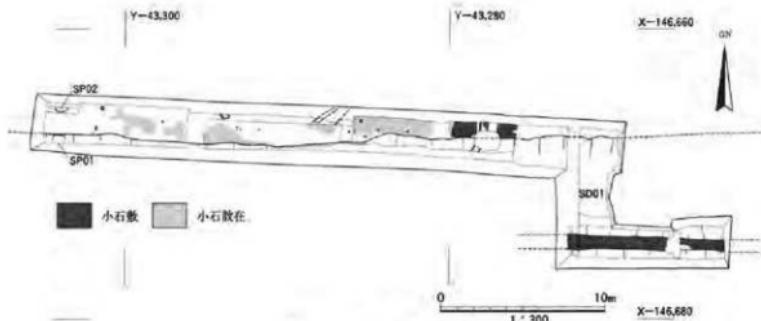


図3 I区第1トレンチ遺構図

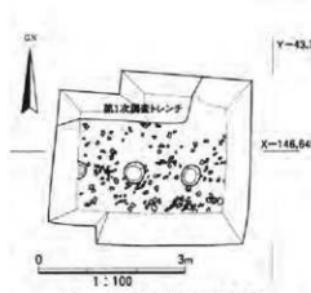


図4 I区第2トレンチ遺構図

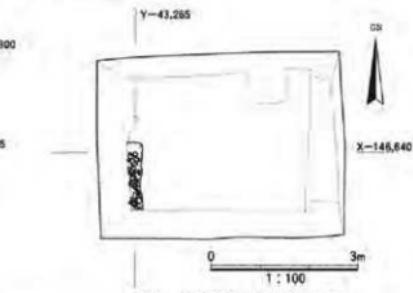


図5 I区第3トレンチ遺構図

た。なお、第1トレンチを東西に貫通する堀SD01は幅約6.0m、深さ約2.7mを測る。

第2トレンチ(図4)では、2b層で散乱する後期難波宮の瓦が出土し、その中には鬼瓦の破片も含まれていた。本トレンチでも前期難波宮朝堂院回廊の柱穴の発見が予想されたが、上述のように瓦が多く出土したため、それより下へは掘下げずに保存することとなった。そこで、本トレンチの西壁に沿った部分のみ深掘りトレンチを入れた結果、3a層上面から深く垂直に近く掘込んだ遺構が見つかったが、その性格は明らかでない。なお、第2トレンチの北側で検出した現代の落込みは第1次調査のトレンチである。

第3トレンチ(図5)でも3a層上面にて瓦の堆積が見られたが、トレンチの南西隅に集中し、かつ3a層がわずかにくほんでいた。またこの層準で小石の散在が認められることもあり、それ以下は保存した。東壁沿いのトレンチでは3a層の下から掘込む遺構が確認された。これがもし柱穴であれば、掘形は南北1.2m以上で、柱抜取穴の直径は0.6m弱の規模であったことになる。

## II区

第1トレンチでは近世～近代の搅乱がひどく、トレンチの西端や中央付近で局部的に地山が高く残っていたにすぎなかった。そこでは難波宮下層遺跡の建物跡かとみられる小型の柱穴などが見つかったものの、確実な難波宮の遺構は確認されなかった。

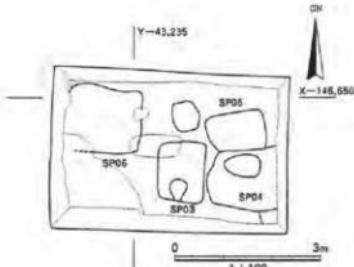


図6 II区第2トレンチ遺構図

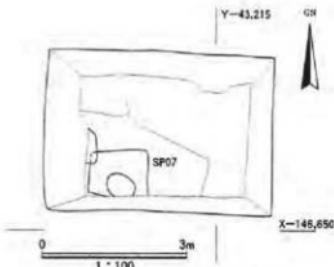


図7 II区第3トレンチ遺構図

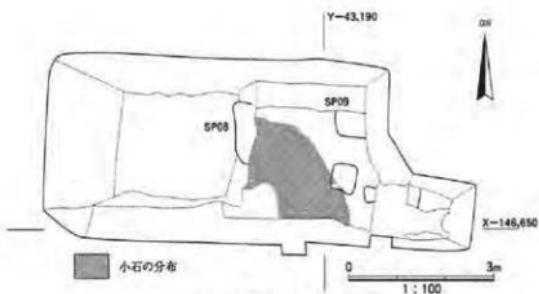


図8 II区第4トレンチ遺構図

第2トレンチ（図6）では2b層の下がすぐ地山であり、その上面で方形の大型遺構が4基見つかった。そのすべてで柱痕跡を確認する余裕はなかったが、これらは柱穴であろう。SP03は掘形が東西約1.0m、南北約1.3mの規模であり、SP04・06などはもっと大きい。これらは柱筋に沿って並んでおらず、時期の異なる柱穴群かと思われる。やや小型の柱穴（東西0.5m、南北0.7m）もある。

第3トレンチ（図7）でも擾乱の底付近で大型の柱穴SP07が検出された。これは第2トレンチのいずれかの柱穴と組合って1棟の建物を構成した可能性がある。

第4トレンチ（図8）も擾乱がひどかったが、東半は比較的よく残っていた。そこでは2b層に小石が多く包含されており、これはもとはその下面（3a層上面）に敷かれた小石であったと思われた。トレンチ中央部で擾乱の壁面観察によって、東西0.8m以上、南北1.3m以上の柱穴SP08の存在が知られた。これは北方で見つかっている難波宮東方官衙を東西に分かつSA03（前期の堀）やSC02（後期の回廊）のライン上に位置するため、そのいずれかの柱穴とみられる。箱状の規格的な掘形ではなく、底部が段状に掘込まれている特徴から見ると、前期難波宮の柱穴かもしれない。このトレンチではSP08の東に小規模な柱穴（東西0.5m、南北0.6m）のはか、規模不明ながら大きな柱穴SP09（SP08より0.2m以上深い）も見つかっている。

### III区

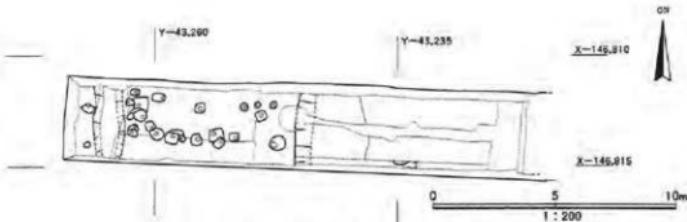


図9 III区第1トレンチ遺構図

第1トレンチ(図9)では東半部に旧建物の厚い基礎が残存しており、基礎下にも地山が遺存していることが見てとれたが、掘削不可能なため西半部のみでの調査となった。地山上面において古代の溝状遺構や難波宮下層の柱穴を検出した。第5・6トレンチでは遺構は確認されなかったものの、地山や古代の地層が良好に遺存することが確認された。なお、調査地付近の地形は第1・5・6トレンチから東方に向けて落込んでおり、第2・3・4トレンチではその影響からか、地山を良好な状態で検出することができなかった。特に第2トレンチでは地山が深く、西端では地表下約5mで地山を検出したものの、東端では地表下約7mでも地山を検出することができず、かわりに木簡が多く含まれる地層を検出した。この地層の土を一部取上げて洗浄したところ、古代の土器とともに木簡が2点出土した。1点の木簡には裏表にそれぞれ文字が2字ずつ記されている。欠損しているため正確なところは不明であるが、片面は「君□」、もう片面は「日子」と思われる。具体的な内容については今後の検討課題であるが、本層の存在から第2トレンチ周辺には古代に谷あるいは落込みが存在していた可能性が考えられ、その埋土に古代の遺物が多く含まれている可能性が明らかとなった。

#### 〈まとめ〉

今回の調査では、ほとんどの調査区において古代の包含層あるいは地山を良好な状態で確認することができた。特にⅠ・Ⅱ区では難波宮の柱穴を確認し、当該区内に難波宮の遺構がさらに拡がることが確実となった。また、Ⅲ区においては地山確認のために深く掘削したトレンチから古代の土器とともに木簡が出土し、古代には谷あるいは落込みとして存在していた可能性が推測された。このように今回の調査ではこれまであまり発掘の進んでいない難波宮の東方・東南方地域において貴重な成果を得ることができた。今回見つかった柱穴の統計や古代の谷の存在など、より広い範囲における調査の継続が切望される。

I区及び難波宮史跡公園  
(南東から)  
左後方に大極殿復元基壇



I区第1トレンチ西端  
(西から)  
手前左に前期難波宮  
回廊の柱穴



I区第1トレンチ  
中央～西 (東から)  
白線の左側は  
豊臣期の堀



II区第2トレンチ  
(西から)  
柱穴等



II区第3トレンチ  
(南から)  
柱穴



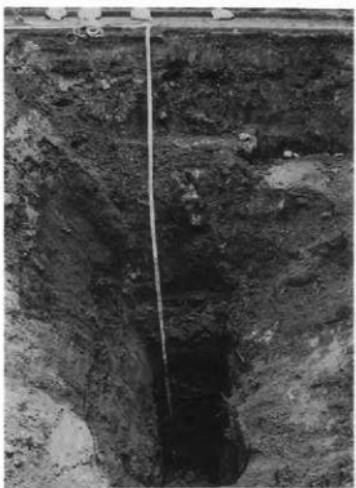
II区第4トレンチ東半  
(北西から)  
小石群と断面の柱穴



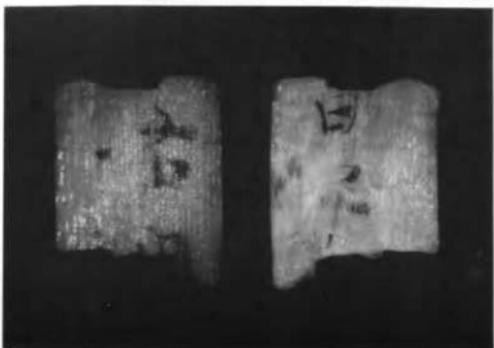
III区第1トレンチ  
古代柱穴検出状況  
(南東から)



III区第2トレンチ東端  
深堀り状況  
(西から)



III区第2トレンチ東端  
出土木簡



## 上本町北遺跡発掘調査(UN02-5)報告書

- ・調査個所 大阪市中央区上汐町1丁目49
- ・調査面積 約90m<sup>2</sup>
- ・調査期間 平成14年8月21日～平成14年9月6日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・松本啓子

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は上町台地の尾根近くにあり、標高は約20mである。ここは古代の難波京右京、豊臣期の城下町「平野」の北西隅と推定される場所で、近隣の調査で古墳時代や奈良時代、中世・近世の遺構や遺物が見つかっている(図1)。

平成14年8月6日に試掘調査(UN02-4次)を行なったところ、地表から0.8m下の後述する地山層(第3層)の上面で古代とみられる遺構が確認されたため、発掘調査を実施することとなった。調査は近世以降の地層を重機により除去する予定であったが、試掘で近世とみられた地層(第1層)に古代や中世の遺物が多く含まれていたため、重機による掘削は現代の地層までとし、以下の地層と遺構をすべて人力により掘削・精査した。その成果は図面・写真等で記録した。

なお、本調査では方位は磁北、標高はTP値を用いた。

9月6日に現地におけるすべての作業を完了した。



図1 調査地周辺図



図2 調査の位置

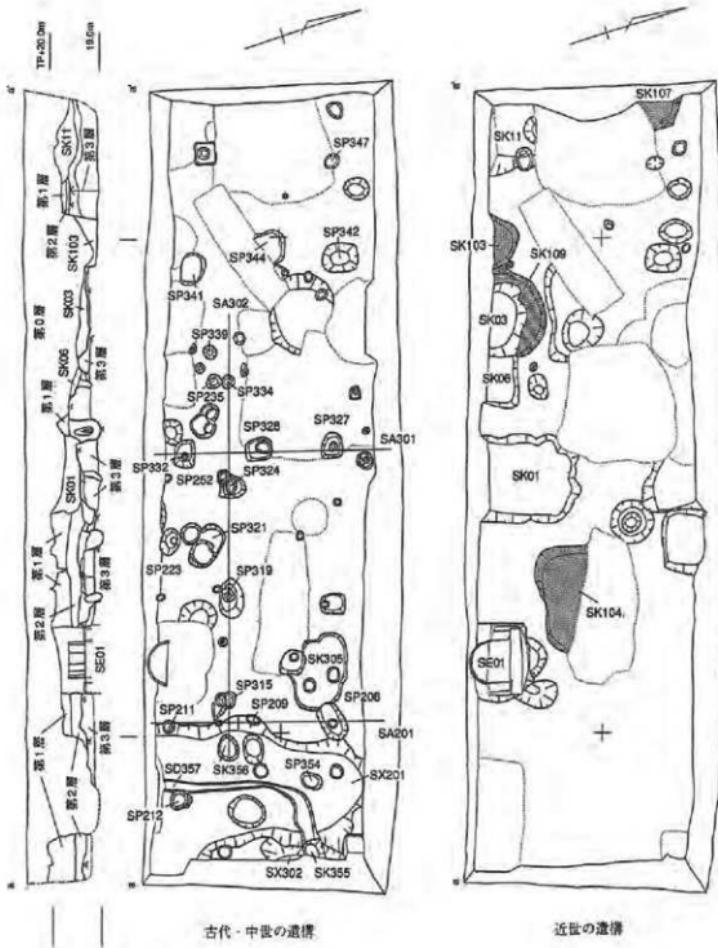


図3 造構平・断面実測図

## 〈調査の結果〉

### 1. 層序(図3)

現地表面はほぼ平坦であるが、広い範囲でみると本調査地より南東側に高い部分があり、本調査地は北西に向かって低くなる斜面にある。地山とみられる第3層の上面は西が高く東が低くなっている。したがって表土層との間の第1・2層は東側ほど厚く堆積する。

第0層：近現代の地層で、重機で除去した。

第1層：灰褐色砂礫混りシルト層で、炭や焼土が混じる整地層である。出土遺物は中世や古代のものが多いが、備前焼の袋物なども出土したので、時期の上限は中世末から近世初頭とみられる。本層上面で近世後半の遺構を検出した。

第2層：暗灰褐色～暗赤褐色砂礫混り粘土質シルトの整地層で、炭が混じる。第1層と同様に古墳時代から中世後半までの遺物が圧倒的に多いが、図5の17世紀代の肥前系磁器染付碗(図5の59)が1点出土した。これが混入でないかぎり、本層は近世の整地層ということになる。また本層上面・層中・下面とも遺構は検出されなかったので、第1層と同時の整地の可能性もある。

第3層：黄褐色シルト質粘土層である。遺物は出土せず、本層以下を地山と考えた。中世以前の遺構は、第2層にこれらに由来するとみられる古い時代の遺物が多量に混入すること、および周辺地形の傾斜とは異なる本層上面の傾斜からみて、第2層基底面のものである。

### 2. 遺構と遺物(図3～5)

#### i) 中世以前の遺構と遺物

第2層基底面で柱穴・土壤・溝・ピットを検出した。便宜上、中世の遺物を含む遺構と、これらの遺構と同様の埋土(灰褐色砂礫混り粘土質シルト)をもつ遺構に200番代の番号を付けた。また中世の遺物を含まず、古代以前の遺物のみ出土した遺構は300番代としている(図3)。300番代の遺構の埋土は暗灰褐色砂礫混りシルトや暗赤褐色シルト質粘土などである。主な遺構は次のとおりである。

柱穴は一直線に並ぶ組合せが3組(SA301・302・201)あり、それぞれ建物または構であったと考えられるが、全貌は明らかではない。

SA301は長辺約0.6m、短辺約0.4m、検出面からの深さが約0.5mの平面長方形の柱穴が、約1.5mの間隔で南北に3個並ぶもので、柱や抜取り穴が確認された。柱の直径は0.15mほどである。柱穴掘形の埋土は灰褐色砂礫混りシルトで、柱または抜取り穴の埋土は暗赤褐色粘土である。須恵器・土師器の破片が出土したが、詳細な時期は不明である。よく似た埋土のSP341・342・344と組合せて建物になる可能性もある。SP344からは7世紀代の土師器高杯(図4の10)が出土した。

SA302は東西方向の柱列である。SP319がもっとも残りの良い柱穴で、短径0.5m、長径は約0.8mあるが、深さは0.05mしか残っていない。平面は梢円形である。SP324は長径0.6m、短径0.5mの柱穴掘形と直径0.2m程度の柱痕跡が確認された。SP315・334は直径0.25mほどの柱または抜取り穴しか残っていない。これらは2.15mの間隔で4個並ぶ。柱穴掘形の埋土は灰褐色砂礫混り粘土で、柱または抜取り穴の埋土は灰褐色粘土質シルトである。SP315からは奈良時代の土師器皿3が出土した。

SK305は長軸1.6m、短軸1.1m、深さ0.1mほどの浅い不整形土壤で、土師器の羽釜15などの古代

の遺物が出土した。中世の柱穴SP208に切られる。

SK355は東壁際で見つかった長辺0.5m以上、短辺0.4m、深さ0.4mほどの平面長方形の土壙である。埋土は暗灰褐色砂礫混りシルトで、SD357を切る。7世紀の土師器杯1がほぼ完形で出土した(図版下段)。他に遺物は出土していない。

SP321は炭の混じる暗灰褐色粘土質シルトで埋ったピットで、形状からみて柱穴の可能性があるが、うまく組合うものがない。土師器の皿5・7と壺14、須恵器底部20・23など、奈良時代の遺物が出土した。

後述の中世の遺構SX201の下で、幅0.2m、深さ0.08mほどのL字に曲がる溝SD357と、長径0.5m、

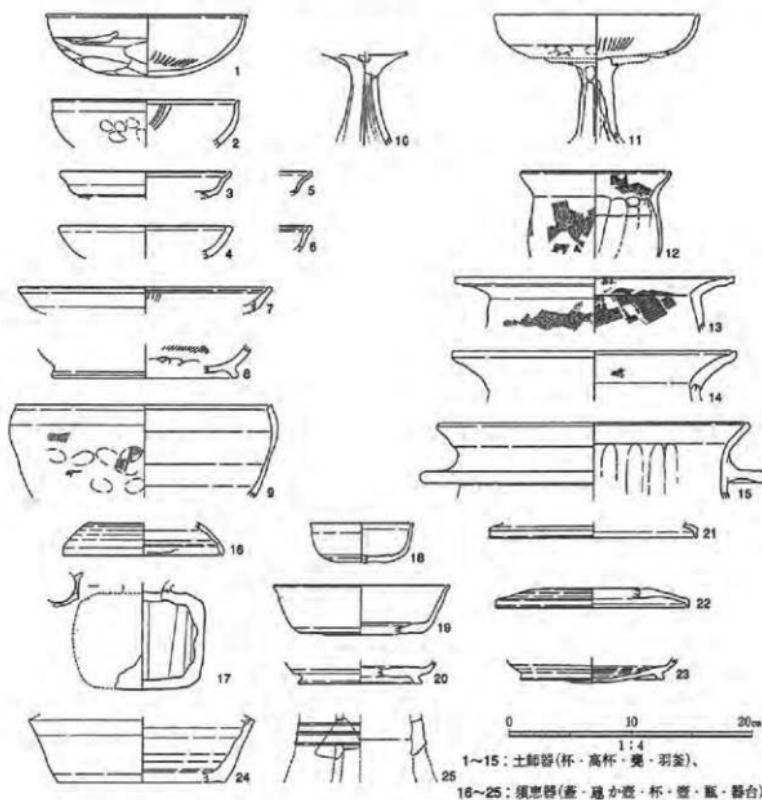


図4 古代の遺物

SK305(15)、SK355(1)、SK356(6・13・22)、SX302(4)、SP315(3)、SP321(5・7・14・20・23)、SP339(16)、  
SP344(10)、SP347(21)、SP354(12)、SP209(25)、SX201(2・9・11・17)、第2層(8・18)、第1層(19・24)

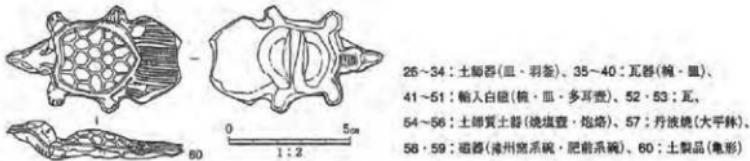
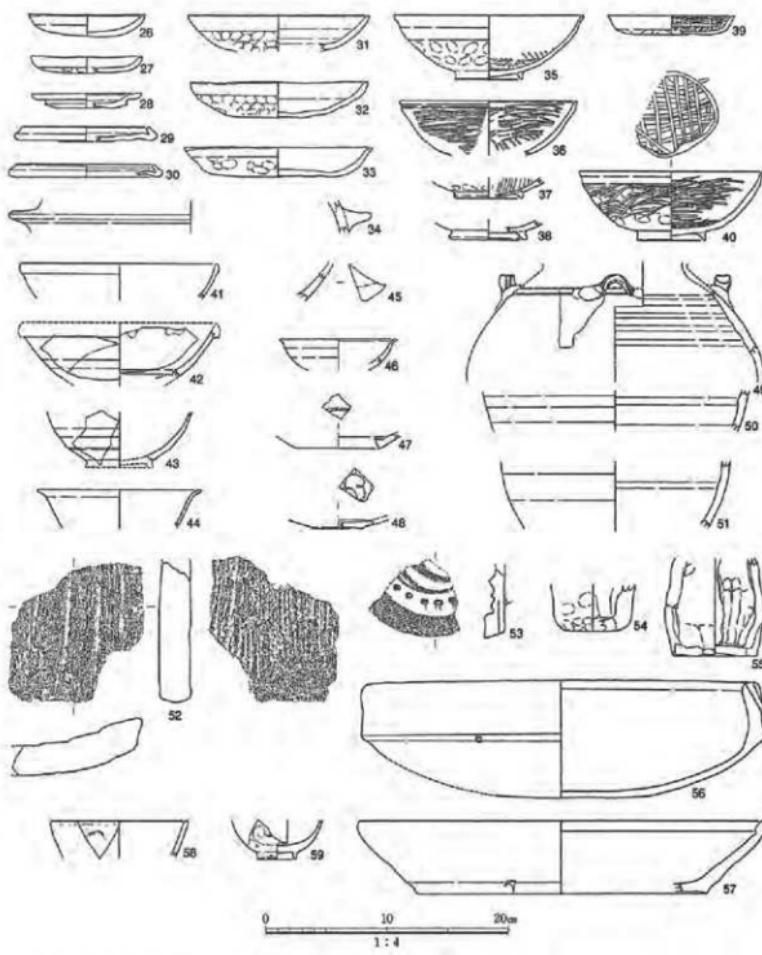


図5 中世・近世の遺物

SX201(26・27・29~34・36・37・39~41・43~45・47・49・52), SP212(38), SP235(28), SP252(35), SK103  
(53・57), SK109(54・55・58), SK03(60), SK11(56), 第2層(48・50・59), 第1層(42・46・51)

短径0.4m、深さ0.3mほどの平面楕円形ピットSP356を検出した。两者とも埋土は暗灰褐色砂礫混りシルトである。SD357から遺物は出土していないが、SP356からは土師器の皿6・壺13と須恵器の杯蓋22が出土した。奈良時代の遺物である。これらの遺構はともに古代に遡る可能性がある。

このほかSP347・354・SX302からも奈良時代の遺物(土師器皿4と壺12、須恵器杯蓋21)が出土し、SP339からは古墳時代の須恵器杯蓋16が出土した。

SA201はSP208・209・211で構成される南北に並ぶ柱穴列である。柱穴の間隔は約1.7mである。比較的残りの良いSP208でも深さは0.15mほどしかなく、上部は大きく削平されている。SP208の掘形は長径が約0.8m、短径が約0.6mの平面楕円形である。SP209・211は直径0.2mほどの柱または抜取り穴とみられるピットがわずかに残っていたにすぎない。SA201の軸はSA301よりも北で東に振る。SP208の掘形埋土は灰褐色砂礫混り粘土質シルトで、SP208の柱部分とSP209・211の埋土は暗灰褐色砂礫混りシルトである。SP223がSP208と同様の埋土で、SA201と組合って建物となる可能性がある。固化した遺物はないが、SP208の掘形から瓦器楕の破片が出土し、後述のSX201を切っているので、SA201は中世後半かそれ以降の遺構と考えられる。

SX201は調査区東端で検出した南北が4.3m以上、東西が狭いところで2.0mほどの不整形の掘込みで、深さは約0.2mである。第2層の暗灰褐色～赤褐色砂礫混り粘土質シルトで埋まっている。SX201からは大量の遺物が出土したが、図5の土師器皿26・27・29～33、羽釜34、瓦器の楕36・37・40と皿39、中国製白磁の玉縁碗41・43・45、端反碗44、皿47、多耳壺49などが、SX201の埋まつた時期を示すものと考えられる。およそ12世紀後半から13世紀ごろである。

SX201と同じころの遺物が出土した遺構にSP212・235・252がある。SP212はSX201を除去して見つかった。いずれも直径が0.3～0.4mの円形または楕円形のピットで、深さは0.4mほどある。埋土はSP212が暗灰色砂礫混りシルトで、ほかは暗赤褐色砂礫混り粘土である。図5に土師器皿28と瓦器楕35・38を図示した。

この他、多数の土壙やピットを検出したが、時期や性格のわかるものは少ない。

また本調査では、新しい時期の遺構や地層から古代以前の多種多様な遺物が多数出土した。これらの遺跡資料は遠くから運ばれたものとは考えにくく、本調査地周辺にあった遺構に埋蔵されていたものが中世や近世に削平を受け、再堆積したものと推定される。これらを見ると、古墳時代のもの(須恵器の壺か壺17・器台25)、7世紀ごろのもの(土師器の杯2・高杯11、須恵器の杯18)、8世紀ごろのもの(土師器杯高台8・鉢9、須恵器杯19・平瓶24)などがあり、各時代においてここで人が活動していたことが窺える。

#### ii) 近世の遺構と遺物

16世紀末～17世紀の遺物が出土した土壙と18世紀後半以降の井戸・土壙・ピットが見つかった。16世紀末～17世紀の土壙には平面図に網掛けをして100番代の遺構番号を付いている(図3)。18世紀後半以降の遺構は第1層上面から埋込まれているが、16世紀末～17世紀の遺構が検出されたところは第1・2層が失われており、これらの遺構が推定される両層の位置よりも低いところで検出されたため、掘込み面は判然としない。

南壁際でSK103とSK109を検出した。SK103は深さが約0.7m、直径約1.2mの平面円形の土壙で、図5の巴文軒丸瓦53・丹波焼大平鉢57が出土した。これらは16世紀末～17世紀初頭の豊臣後期のものである。SK109は深さが約0.3m、直径約1.8mの平面円形の土壙で、土師質土器焼塙壺54・55、中国漳州窯系青花碗58が出土した。SK103よりやや後出の可能性があるが、下っても17世紀代である。同化しえなかつたが、西壁際のSK107や調査区中央のSK104からも17世紀代の遺物が出土した。

これら4基の土壙以外の遺構は、いずれも第1層上面から掘込む18世紀後半以降の遺構である。図5にSK03から出土した軟質施釉陶器の亀形60とSK11から出土した土師質土器炮烙56を図示した。

#### 〈まとめ〉

今回は調査面積が狭かったのにもかかわらず、さまざまな情報を得ることができた。

今回見つかった古墳時代や7・8世紀、中世後半、豊臣期の各時期の遺構・遺物は、周辺の調査でも徐々に見つかりつつある。こういった時期には、本調査地北側に前期・後期の難波宮や豊臣秀吉の大坂城が存在しており、本調査地一帯は宮殿周辺の難波京や大坂城下町などの一角であったと考えられる。したがって、これらの情報は一地域史のみならず、日本全体の歴史を考える上でも大きな手がかりとなり得る。

今後、周辺の調査結果とあわせてさらなる検討が必要であろう。

調査地全景  
(西から)



東部の遺構  
(北西から)



遺物出土状況  
(西から)



### III 天王寺区

## 上本町南遺跡発掘調査(UN02-1)報告書

- ・調査個所 大阪市天王寺区小宮町14-5
- ・調査面積 28m<sup>2</sup>
- ・調査期間 平成14年8月28日～平成14年9月2日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京鶴覚・横山洋

### <調査に至る経緯と経過>

当該地は上本町南遺跡の中央付近に位置し、古代難波京の南部地域にあたると想定されている(図1)。南西約200mのNW81-4次調査や東約150mの1992年度試掘地点で奈良時代の井戸が見つかるなど、近隣で遺構・遺物が発見されている。2002年8月22日、標題の工事に先立って大阪市教育委員会による試掘調査が実施され、遺物包含層の存在が知られたので、上記の日程で本調査を行うこととなったものである。

### <調査の結果>

#### 1)層序(図3)

第1層：近世のシルト混りの砂で、肥前磁器や瓦のほか、須恵器・土師器・製塩土器・瓦器なども



図1 調査地位位置図

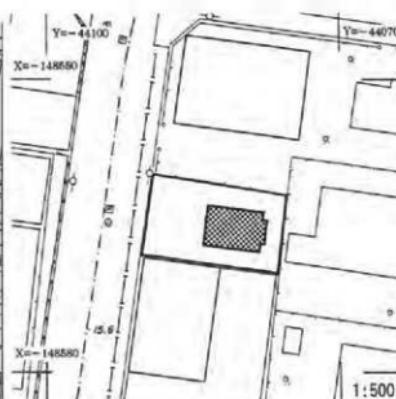


図2 調査範囲位置図

含む。

第2層：地山土のブロックを含むシルト混りの砂礫で、東側に部分的に分布する。遺物は出土せず、年代は不明であるが、第1層を大きく越るものではない。

第3層：砂礫混りのシルト層で、いわゆる地山にあたる上町層である。

#### 2) 遺構と遺物(図4)

SK02

調査地の北側で検出した土壤で、東西は1.1mであるが、調査範囲外に及ぶ。深さはわずか0.08mしか残っていなかった。遺物は土器部の細片15点にすぎず、実測できるものもない。おそらく古代の土器と思われるが、時期の詳細は不明である。破片の中には製塙土器やフイゴの羽口らしきものもある。

#### その他の遺構

SK02以外の遺構はみな埋土が第1層に類似し、近世のものとみられる。小さな柱穴SP02から柿釉を施した軟質施釉陶器の細片が出土した。

#### ＜まとめ＞

先述したとおり、調査地の周辺では古代の遺構や遺物が見つかっており、今回の調査でも、難波京にかかる発見が期待された。実際には必ずしも良好な状態ではなかったものの、古代である可能性が高い遺構が見つかったことは、大きな成果であった。今後ともこうした事例の蓄積が必要であろう。

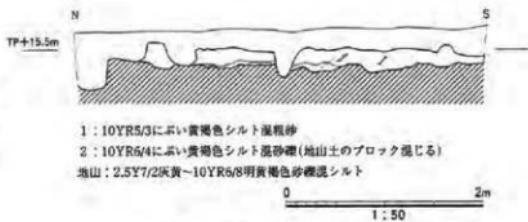


図3 東壁地層断面実測図

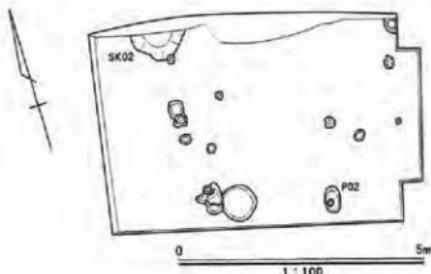


図4 遺構実測図



調査地全景（西から）



P02(手前)と東壁断面（南西から）

## 伶人町遺跡・茶臼山古墳発掘調査(RJ02-4)報告書

- ・調査個所 大阪市天王寺区逢坂2丁目18-19
- ・調査面積 約15m<sup>2</sup>
- ・調査期間 平成14年12月17日～平成14年12月20日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・藤田幸夫

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は、茶臼山古墳の北側、四天王寺の西側に位置しており、古代以来栄えた場所と想定される。12月10日に試掘調査を行った結果、敷地北辺部において東西方向の溝状の遺構が検出された。この遺構は、出土遺物から中世に遡るものと考えられた。以上の結果に基づいて、予定掘削深度が溝面以下となる約15mを対象として調査を実施した。なお、この調査範囲には試掘調査で検出した溝状の遺構は含まれない。

調査の方法は、明治期以降と思われる堆積層を重機で掘削し、それ以下地山までを人力で掘削し、遺構の検出を行った。掘削深度は、予定建物の基礎深度である地表下1mまでとした。

### 〈調査の結果〉

#### 1. 層序

第0層 現代堆積層である。

第1層 第2次大戦後の整地層である。最下部は、火を受けて赤変した瓦を多く含み、その上を砂層



図1 調査地位図(S=1:5000)



図2 調査区配置図

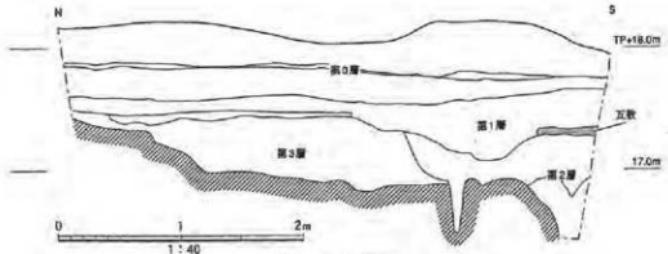


図3 東壁地層図

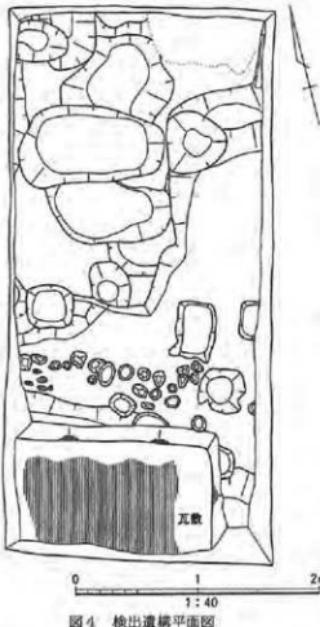


図4 検出遺構平面図

で盛り土している。この盛り土で、それ以前に  
あった南北の高低差を解消している。

第2層 暗灰黄色シルト層で、江戸時代後期頃  
の堆積層である。瓦敷はこの層の上面で検出し  
た。この層は、北部には存在しなかった。

第3層 黒褐色シルト層で、江戸時代後期頃を  
中心とする遺物を含む層で、南部ではなく、北  
部では土壇等の遺構の埋土となる。調査地北部  
では、第3層と第1層の間にコンクリート土間  
が見つかった。

第4層 黄褐色細砂層で、いわゆる地山である。

## 2. 遺構と遺物(図4・5)

**土壤群(図4、図版下段)** 南端を除く個所で  
地山上面から検出した遺構群である。出土遺物  
は、図5の瀬戸端反碗5、志野灯明具6、京・  
信楽系碗7、唐津碗8などである。埋土中に含  
まれるその他の遺物から、江戸時代後期頃に構  
築されたことが判明した。

**瓦敷(図版上段)** 南部の第2層上面で検出し  
たもので、東西方向に延びる。平瓦を縦に半裁

し、半截面を下にして立てており、南北0.9m以上の遺構である。長さは、西端が後世の土管によっ  
て埋されているが、東西1.5m以上に延びるものであろう。この瓦敷の機能であるが、おそらく道路  
と想定される。この遺構が、現在の道路と平行するすることからも道路の可能性が高いであろう。こ  
の瓦敷の下部に当たる第2層から図5の1~4が出土している。1は瀬戸輪花皿、2は瀬戸小碗、3  
は肥前の色絵蓋である。4は軟質施釉陶器の灯明皿である。

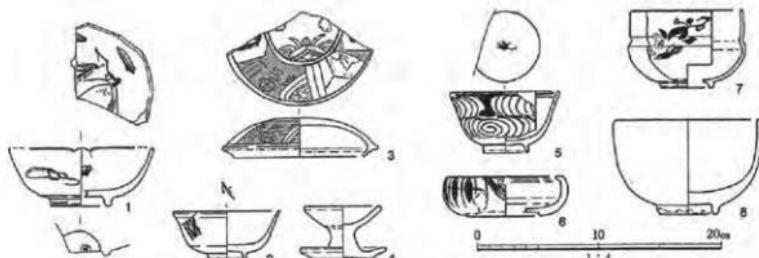


図5 遺物実測図(1~4:瓦積み造構下部堆積層、5~8:土壤群)

(まとめ)

今回の調査では、近世以前に遡る遺構・遺物は検出しなかった。

ただ、地山面の遺存状況はよく、また、試掘調査で溝状の遺構が見つかっていることから、調査地周辺が中世にはすでに栄えていたことが想定される。今後、周辺の調査で古代あるいは、中世の遺構や遺物を検出する可能性は高く、調査を積み重ねることによって伶人町遺跡の実態が明らかになっていくと思われる。

瓦敷遺構  
(南から)



南壁地層断面  
(北から)



調査地全景  
(北から)



## IV 東淀川区

## 崇禪寺遺跡発掘調査(SZ02-1)報告書

- ・調査個所 大阪市東淀川区東中島4丁目13-1~12-24
- ・調査面積 約20m<sup>2</sup>
- ・調査期間 平成14年12月9日~平成14年12月10日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覺・池田研

### 〈調査に至る経緯と経過〉

崇禪寺遺跡は大阪市北部の東淀川区東中島4・5丁目、淡路1丁目に所在し、東西750m、南北550mの範囲に亘る。1981年の大阪府教育委員会による本格的な調査以来、当協会によつても15件におよぶ本調査が行われており、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする遺構や遺物が多数検出されている〔大阪市文化財協会1999〕。近年行われたSZ01-4次調査では中世以降に著しい擾乱を受けており、遺構は検出されなかつたが、庄内式から布留式を中心とする土器が多く出土した〔大阪市文化財協会2001〕。

今回の調査地はSZ01-4次調査地の北隣、SZ89-6次調査地および1981年の大阪府教育委員会の調査地の西方に位置する(図1)。当地において大阪ガス株式会社によるガス管理設工事が計画されたため、2002年12月3日に大阪市教育委員会により試掘調査が行われたが、既に本管工事部分の西半は掘削が終了した状態であった。この部分の断面観察の結果、現地表下約0.3mの地山上面で黒~黒褐色砂を埋土とする土壇が検出され、弥生時代後期から古代にかけての土器が出土した。

本調査は本管工事部分の東半と9本の引き込み管部分について行った(図2、図版上段)。調査で使用した水準値は現地表(アスファルト道路)面からの減値であり、方位は磁北である。

### 〈調査の結果〉

#### 1. 層序

本調査地の現地表面の水準は、SZ01-4次調査地(TP+2.8~2.9m)とほぼ等しい。現地表下約

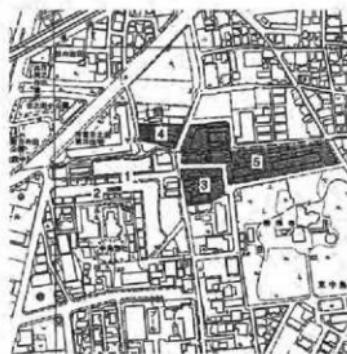


図1 調査位置図(1:5,000)

1. SZ02-1(今回の調査地)
2. SZ01-4
3. SZ89-6
4. SZ89-13
5. 大阪府教育委員会(1981年)

0.3mで地山が検出されたが、本管工事部分の北側には水道枝管が、南側の道路のほぼ中央には水道本管が埋設されており、本管工事部分のごく一部を除いて調査区の大部分が擾乱を受けていた。地山層はにぶい黄色(2.5Y6/4)細～粗粒砂からなり、現地表面から約0.8m以下では砾が混る。

## 2. 遺構と遺物(図3・4、図版中・下段)

本管工事部分の地山層上面ではSX01～03を検出した。いずれも遺構の一部を確認したのみであるため、平面形やその性格については不明である。

**SX01** 北壁断面では東西0.84m、深さ0.44mあった。埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)極細～中粒砂で、土師器壺の底部や壺の口縁部が出土した。

**SX02** 南壁断面では東西0.56m、深さ0.42mあった。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)極細～粗粒砂で、弥生土器・土師器の細片が出土した。

**SX03** 東端は擾乱を受けており、南壁断面では東西0.50m以上、深さ0.36mあった。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)極細～中粒砂で、土師器壺の口縁部が出土した。

次に、現代盛土や擾乱から出土した遺物について、試掘調査時の出土資料と併せて報告する。遺物には弥生土器・土師器・須恵器・円筒埴輪などがあり、引き込み管7と本管工事部分の交点を中心に出土している。1・2・4は試掘時に出土した資料で、1・2は高杯の杯部、4は脚部である。1は口径が15.9cmあり、内外面を細かいヨコ方向のミガキで調整している。2は受け部外面の調整がヨコ方向の細かいミガキで、口縁部の内外面と受け部の外面がタテ方向のミガキである。いずれもやや小さな受

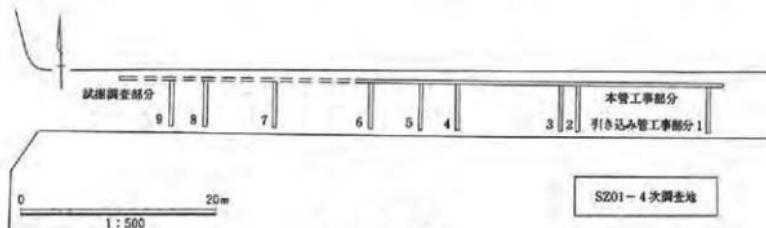


図2 調査区配置図

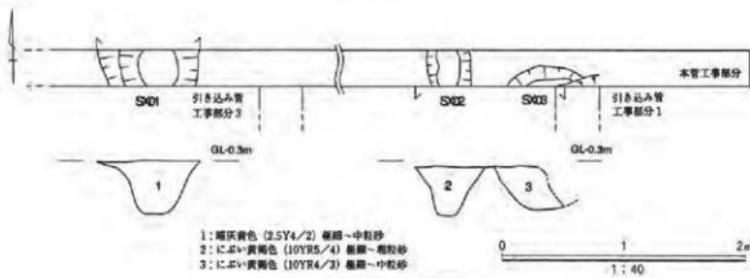


図3 SX01～03平・断面図

け部と直線的に開く口縁部をもち、屈曲部はわずかに段をなす。4は外面をタテ方向のヘラミガキで調整しており、杯部との境にはハケメが残る。内面はヘラケズリを施しており、杯底部の中央には棒状工具による刺突痕が残る。3は引き込み管7から出土した小型器台である。小さく面取られた脚部には、円形のスカシ孔がある。器面の調整は外面がハケの後、ヨコ方向の細かいミガキで、内面がハケの後、ナデである。1~4の胎土はいずれも精良で、微細な長石・石英粒を含む。色調は1~4が橙色、2・3が明赤褐色を呈する。これらの土器のうち1~3はいずれも庄内式の定式化以降の資料で、1・2は布留式に近い段階のものであろう。4はそれより新しく、布留式まで降るものとみられる。

5は円筒埴輪である。タガの突出度は弱く、器面の調整は外面がタテハケで、内面はナデである。胎土中には直径5mm以下の長石・チャート粒を含む。焼成は良好で色調は橙色を呈する。川西宏幸による円筒埴輪編年年V期に属するものである。

このほかに、畿内第V様式まで遡る可能性のある壺や甕、庄内式に属する直口壺や甕、布留式に属する甕などの細片が出土している。

#### 〈まとめ〉

本調査地の大部分は水道管理設などにより著しい擾乱を受けていたが、擾乱の埋土には弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする時期の土器が含まれていた。検出された遺構から出土した遺物も同時期のものとみられ、本来は調査地全体に当該時期の遺構が拡がっていたと考えられる。

一方、古墳時代中～後期に属するとみられる円筒埴輪は、大阪府教育委員会の調査をはじめ、これまでに出土している当該期の埴輪とともに、崇禪寺遺跡における古墳の存在を推定させる資料として重要な意味をもつといえよう。

#### 参考文献

大阪市文化財協会1999、『崇禪寺遺跡発掘調査報告』I

2001、『大阪市住宅局による建設工事に伴う崇禪寺遺跡発掘調査(SZ01-4)報告書』

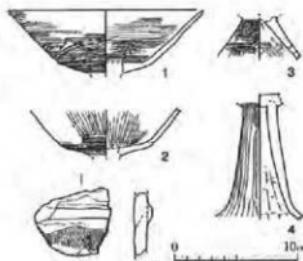


図4 試掘および本調査出土の遺物



調査地全景（西から）



S X01 (南から)



S X02・03 (北から)





V 旭 区



## 森小路遺跡発掘調査(MS02-5)報告書

- ・調査個所 大阪市旭区清水3丁目15
- ・調査面積 225m<sup>2</sup>
- ・調査期間 平成15年2月3日～平成15年2月28日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・櫻井久之・小田木富慈美

### （調査に至る経緯と経過）

森小路遺跡は、大阪市の北西部、旭区新森2～7丁目、清水1～4丁目に所在する。新森中央公園の北東隅を中心にして、半径約400mが遺跡のおよその範囲とされている。

遺跡の発見は、昭和6(1931)年、新森2丁目から清水1丁目で行われた区画整理事業により弥生土器・石器が出土したとの報を受け、同時に島田貞彦・有光教一両氏が行った試掘調査で包含層が確認されたことによる[島田・有光1931]。その後、昭和50年代から民家の建替工事等に伴って発掘調査件数が増加したことにより、この遺跡が淀川左岸の自然堤防上に立地する弥生時代中期を主体とする集落遺跡であることが明らかになってきた。近年に行われた調査(MS01-4次)では、遺跡東端を南北に走る大阪内環状線の東側でも当該時期の遺構・遺物が稠密に分布することが知られ、淀川の流れに沿って北東から南西方向に向けて発達した自然堤防の形状に適応した居住域が設けられていたものと推定され

てきている[大阪市文化財協会2001a]。

今回の調査地は遺跡の北端部に当たり、付近での調査事例はわずかしかない(図1)。大阪市健康福祉局からの開発計画を受け、平成14年9月26日に大阪市教育委員会による立会調査が行われた。敷地面積が3,900m<sup>2</sup>を越えることから、8箇所で試掘を行い、うち2地点で古代以前にさかのばると推測される暗色帯が確認された。当遺跡は石庖丁・木製農具などの出土から弥生時代の水稲農耕を主たる生業としてい



図1 調査地位置図(1万分の1)



図2 調査区の位置(千分の1)

た集落であったと考えられているが[大庭重信2001]、まだ明確な水田址の検出には至っていない。試掘時に見られた暗色帯に畦畔は確認されていないが、立地等からみて、水田址が検出される可能性が考えられた。そのため、暗色帯の確認された試掘場付近において調査を実施することとなった。

試掘結果を踏まえ、調査区は敷地中央部のやや東寄りの場所とし、南北45m×東西5mの大きさで設けることとした(図2)。本調査は平成15年2月3日から着手し、重機により表土から近世作土層までを除去し、中世包含層上に残る近世以降の遺構検出作業から入った。予想以上に広範囲が擾乱されており、その除去作業に時間を要したが、その擾乱部分での壁面観察

により、暗色帯が複数に分かれ、調査区南端でかなり厚く堆積していることがわかった。以後、これらの地層の時期や性格を追及すべく、掘削、観察、記録作成を進めた。26日までにすべての記録作成を終え、同日より埋戻しに入った。埋戻しおよび撤収作業は28日までに終え、現場作業は終了した。なお、調査で使用した水準はTP値、方位は磁北である。

#### 〈調査の結果〉

##### 1. 層序

現地表はTP+1.7m前後であり、深さ約2.2mまでの地層を調査区全体で確認し、南端で深掘りを行つて深さ約3.0mまでの地層の堆積状況を記録した。これらの地層は上位から第0層～第11層に区分される(図3)。調査区全体の地層は中央から南に向うに従い厚く堆積している。北部は中世以降に一段低く地下げされ、この部分は水田として利用されたと思われる。以下で各層の概要について述べる。

第0・1層は現代盛土層である。

第2層は調査区北半部と南端に分布したオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質粗粒砂層で、肥前磁器染付碗のほか土師器・瓦器の碎片が出土した。当層は作土層で、西壁の断面観察では上面に畦畔が認められた。層厚は20cm未満で、前述の畦畔より北で厚くなる。

第3層は黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂を含むシルト質粘土層で調査区全域に分布する作土層である。断面観察では上層と同じ位置に畦畔が確認された。第2層と同様にこの畦畔以北では層厚約20cmと厚くなる。一部で下部に砂礫を多く含む。当層からは肥前磁器・土師器・瓦器の細片が出土した。

第4層は黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土層で、調査区中央から南で認められた作土層である。当層の下面には踏込みが多く認められた。先述した調査区北部の地下げは当層下面の段階で行われてい

る。土師器・瓦器を含む。瓦器は高台の退化した段階のものである。

第5層は灰色(5Y4/1)シルトからなる水成層である。調査区中央よりも南に分布する。これ以下、第8層までは調査区南半のみに認められた。本層中からはTK10型式の須恵器杯蓋が出土している。

第6層は黒色(7.5Y2/1)シルト質粘土層で、作土層である。上・下面では踏込みが顕著に認められる。

第7層はオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト層で、水成層である。

第8層は黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土層で、8a・8bの2層に細分可能である。8b層の上面では南西→北東方向の畦畔状高まりを検出した。出土遺物は弥生土器の細片が1点見られたのみである。

第9層はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト～黄灰色(2.5Y6/1)粗粒砂～礫層で、水成層である。調査区の中央から南に分布し、南に向うに従って層厚を増す。最大層厚は約60cmである。出土遺物はない。

第10層は調査区全域に分布する。北部ではオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質粗粒砂層で比較的安定した堆積状況を示しているが、南部では植物遺体のラミナや流木を挟む水成の黒褐色(10YR3/1)シルト～粘土層で湿地状の堆積層となる。南端では当層下面の状況は平面的に検出しえなかったため、深掘り部分で断面観察を行った。その結果、この部分では地山層と思われる第11層との間に数枚の砂礫～シルト層が認められた。これらも含め、第10層の層厚は調査区の南端で最大100cm、中央より北では5cm前後である。出土遺物がまったくないため当層の年代は不明であるが、同様な植物遺体のラミナや流木の認められる地層は調査地より200m南西で行われたMS87-6次調査の第7層として報告されており、弥生時代中期と推定されている[大阪市文化財

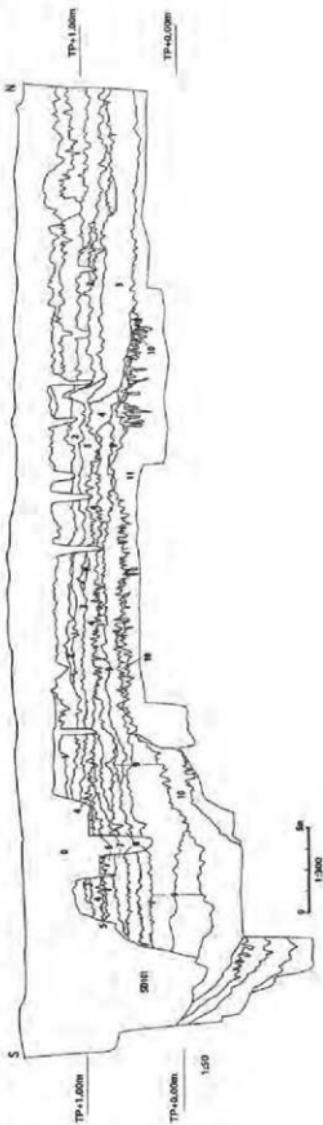


図3 調査地西壁断面図

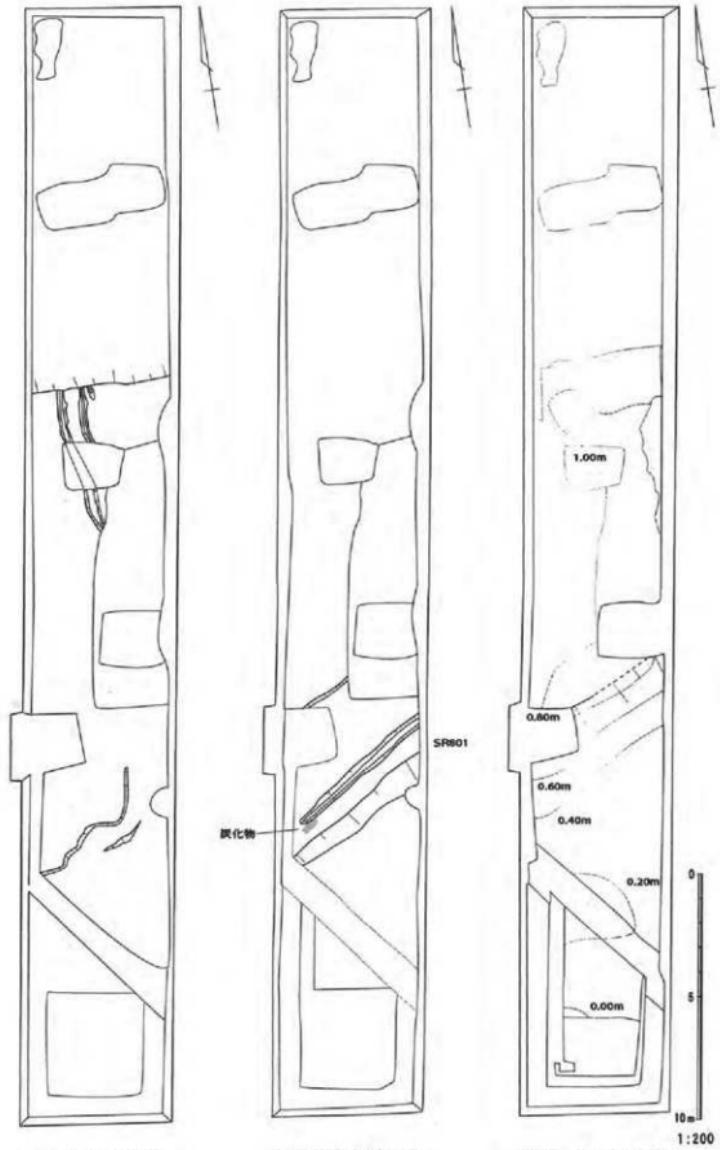
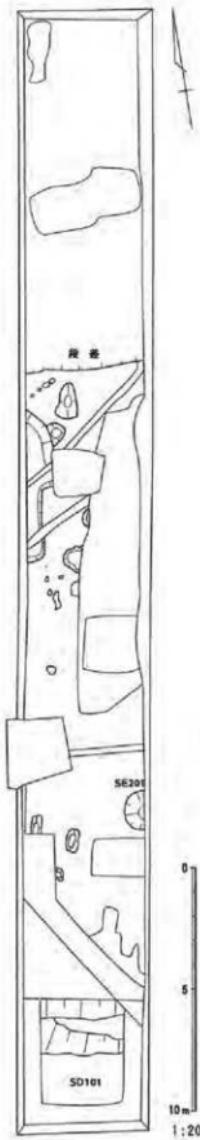
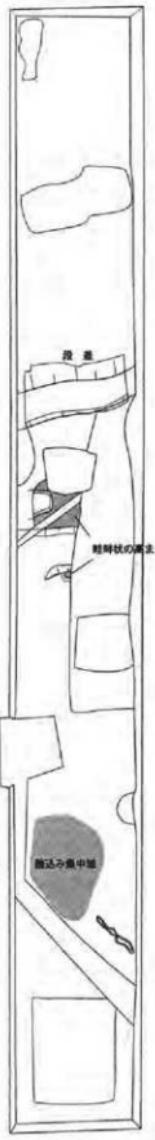


図4 造構平面図(1)



第2層下面検出遺構



第4層上・下面検出遺構

図5 遺構平面図(2)

協会2001b]。当層もこれに當る可能性がある。

第11層はにぶい黄色(2.5Y6/3)砂礫層で、水成層である。部分的に植物遺体の薄層を挟む。当層は上位層よりもしまりがよく、森小路遺跡の地山層に當ると思われる。

## 2. 遺構と遺物(図4・5)

### 弥生～古墳時代

第6層上面では調査区南端付近において踏込みの集中が見られた。踏込みの多くは直径10～15cm、深さ2～8cmある。ウマの足跡であろうか。踏込み内に堆積する第5層中からは古墳時代後期の須恵器が出土しており、畦畔は確認されなかったものの、当時の水田面であった可能性が考えられる。

第6層下面では北半で南北方向の耕作溝を数条検出した。南半には顯著な遺構は認められなかつた。

第8層上面では調査区南部で北東から南西方向の畦畔状の高まりSR801を検出した。幅は0.6m、高さは0.1mと低いもので、地形が南東に向って低くなる変換点に形成されている。南西では炭化物の集積する部分が見られた。なお、SR801の北にはこれに沿う形で溝状の窪みが認められた。

第8層下面では不整形な落込みが数個所で認められたが、これらは木の根等によるものと考えられた。

第10層上・下面では遺構は認められなかつた。

### 中～近世

調査区中央部に第4層上面の畦畔状の高まりが認められ、それに貼付くように土師器小皿が數点出土した。擾乱のため遺構の連続状況は確かめられなかつた。また、その北側で第4層下面に属する0.2mほどの段差が見られた。調査区

南部には第4層下面の踏込みが集中して見られた。第4層の遺構は出土した瓦器などから室町時代に属するものであろう。

上述した第4層下面の段差は第3層下面および第2層下面にも影響し、0.3mほどの段差をなしていた。第2層下面では調査区南部でSE201とした直径1.5m、深さ0.7mの素掘り井戸が検出された。埋土中からは絵唐津等が出土した。17世紀代の遺構であろう。

#### 近代

調査区の南端にSD101とした水路の一部とみられる溝がある。調査地の南側を北西から南東に向かって走る道路はかつての幹線水路の跡で、SD101もこれに関連する施設と思われる。

#### （まとめ）

今回の調査地は遺跡の北側に位置し、弥生～古墳時代における集落の中心からは離れている。弥生時代には調査区南半は湿地であったと推定される。その後、古墳時代に入って水田化されたようである。以後、近世にいたるまで当地はおもに水田として利用されていたと考えられる。

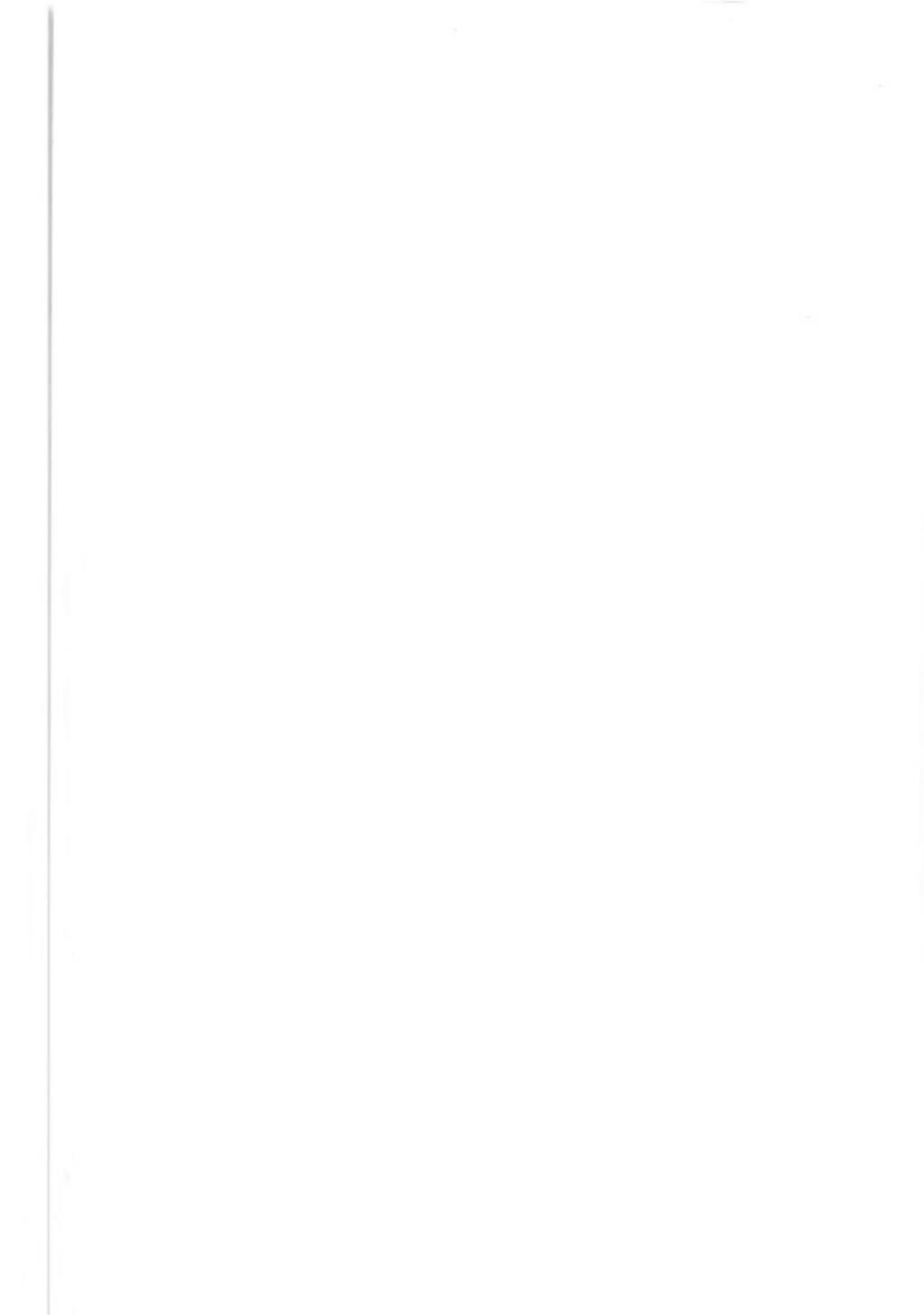
#### 参考文献

- 大阪市文化財協会2001a、「北野幸子氏による建設工事に伴う森小路遺跡発掘調査(MS01-4)報告書」  
大阪市文化財協会2001b、『森小路遺跡発掘調査報告』I  
大庭重信2001、「弥生時代中期の集落構造とその変遷」：『森小路遺跡発掘調査報告』I、pp.208-218  
島田貞彦・有光教一1931、「大阪市東成区森小路発見の弥生式遺跡について」：『考古学雑誌』第21巻第10号、pp.19-37

調査地全景  
(南東から)



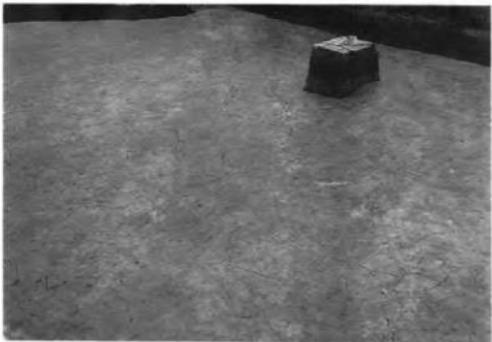
第4層下面および第6層上面の踏込み (南から)



第10層下面検出状況（南から）

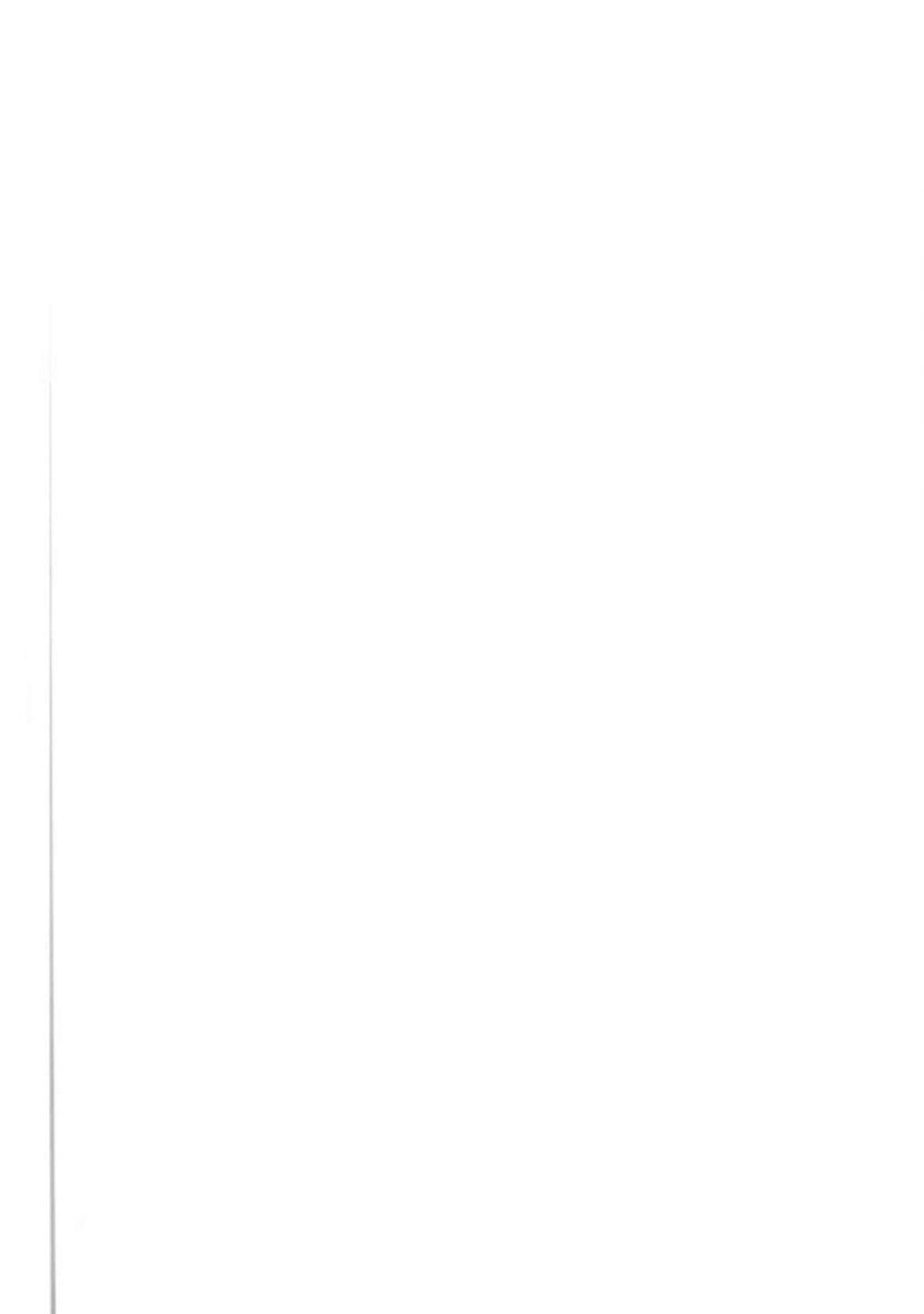


第8層上面畦畔状高まり  
(北東から)



西壁地層断面  
(北東から)





## VI 阿倍野区



## 阿倍野筋南遺跡発掘調査(AS 02-2)報告書

- ・調査個所 大阪市阿倍野区丸山通1丁目3-6・3-7・3-9
- ・調査面積 55m<sup>2</sup>
- ・調査期間 平成14年10月3日～平成14年10月10日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・藤田幸夫・櫻井久之

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は阿倍野筋南遺跡の南西部に位置する(図1)。現地表から見た調査地一帯は、比較的平坦になっているが、西約100mでは上町台地の西側斜面となっている。また、調査地南側40mを東西方向に走る丸山通に向てもわずかに低くなっている。また、調査地南側40mを東西方向に走る丸山通に向てもわずかに低くなっている。また、調査地南側40mを東西方向に走る丸山通に向てもわずかに低くなっている。

阿倍野筋南遺跡ではこれまでに7件にのぼる本調査が実施され、古墳時代前期の竪穴住居・掘立柱建物の検出により、同時代の集落として注目されてきている。そうしたなか、今回、1,340m<sup>2</sup>の敷地が開発対象となり、遺跡の状況を把握するため、平成14年8月13日、15日に大阪市教育委員会による試掘が行われた。その結果、地表下数十cmに地山層が確認され、一部に焼土・炭化物を多く含んだ土壌の存在が認められた。事業者側との協議の結果、その土壌の検出された敷地北東部で5m×10mの調査区を設けることとなった(図2)。

本調査では10月3日に上掘りを行ない、同日より遺構検出作業に入った。方形土壌が方向を描えて並ぶ状況が見られ、これらが掘立柱建物の柱穴である可能性が考えられたことから、市教委を通じ事



図1 調査地位置図

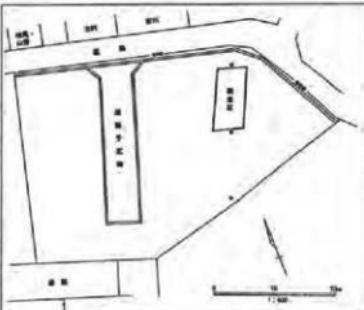


図2 調査区配置図

業者に調査区の拡張について理解をもとめ、調査区西側を5mほど拡げることとなった。その結果、南北方向に主軸をおく3間×2間の掘立柱建物であることを確かめることができたが、試掘時に確認された土壌は調査区内に認められなかつた。8日までに遺構掘削・実測を終え、10日に埋戻しおよび撤収作業を行つた。

なお、この調査で使用している水準はTP値である。

#### 〈調査の結果〉

今回の調査区では現代盛土の直下が地山層となる。調査区の東半分は既設建物の基礎撤去時などに地表下20~40cmまで掘込まれていたが、西半部では数cmで地山面が露出する。その地山層が良好に遺存する部分でTP+14.5mある。

今回検出した遺構は、掘立柱建物1棟、溝1条、ピット1基である(図3)。建物は柱掘形から出土した遺物から判断して飛鳥時代後半に当ると思われる。他の遺構については時期を示す遺物がないが、埋土は掘立柱建物のものに近い。

SB01 一部調査区外となるが、南北7.48m(桁行3間)、東西4.35m(梁行2間)の南北棟建物である(図5)。磁北より北で11°東へ振れる。南妻の柱と西の側柱の掘形が良好に遺存していた。掘形の平面形は隅丸長方形を呈し、その各辺を各方位に向ける。妻の柱穴掘形は東西方向に長辺を沿わせ、その他は南北方向に長辺を揃える特徴が窺える。このことから、調査区北端に見つかった東西方向に長辺を向ける掘形を北妻のものと判断した。残りのよい掘形では短辺50~60cm、長辺80~100cmあり、深さ40~60cmを測る。また、柱痕跡の直径は20cm前後であった。掘形埋土から飛鳥時代の須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器高杯などが出土したがいずれも小片である(図4)。少量の資料から詳細な時期の判断はむづかしいが、飛鳥II~IV、7世紀後半に属するものであろう。

SD01 調査区西側で検出した幅15cm、深さ5cmほどの小溝である。北で西へ36°振れる。埋土にはぶい黄色(2.5Y6/3)粘土質シルトで葉理はみられない。南東方向に向かって深くなる。

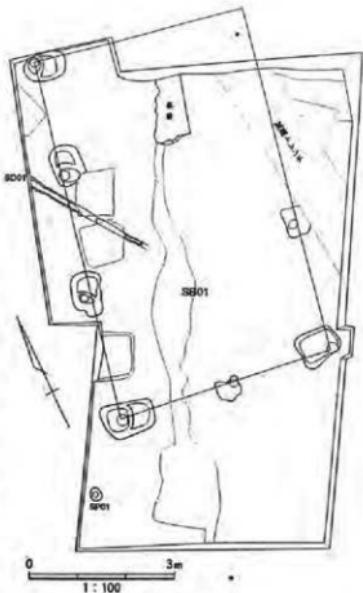


図3 調査区全体図

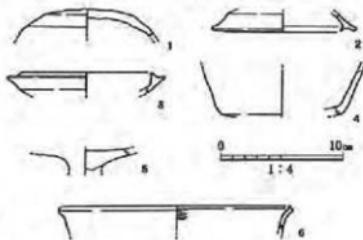


図4 SB01柱穴掘形出土遺物

1:須恵器杯H蓋、2:須恵器G蓋、3:須恵器杯H、  
4:須恵器杯A、5:土師器高杯、6:土師器杯A

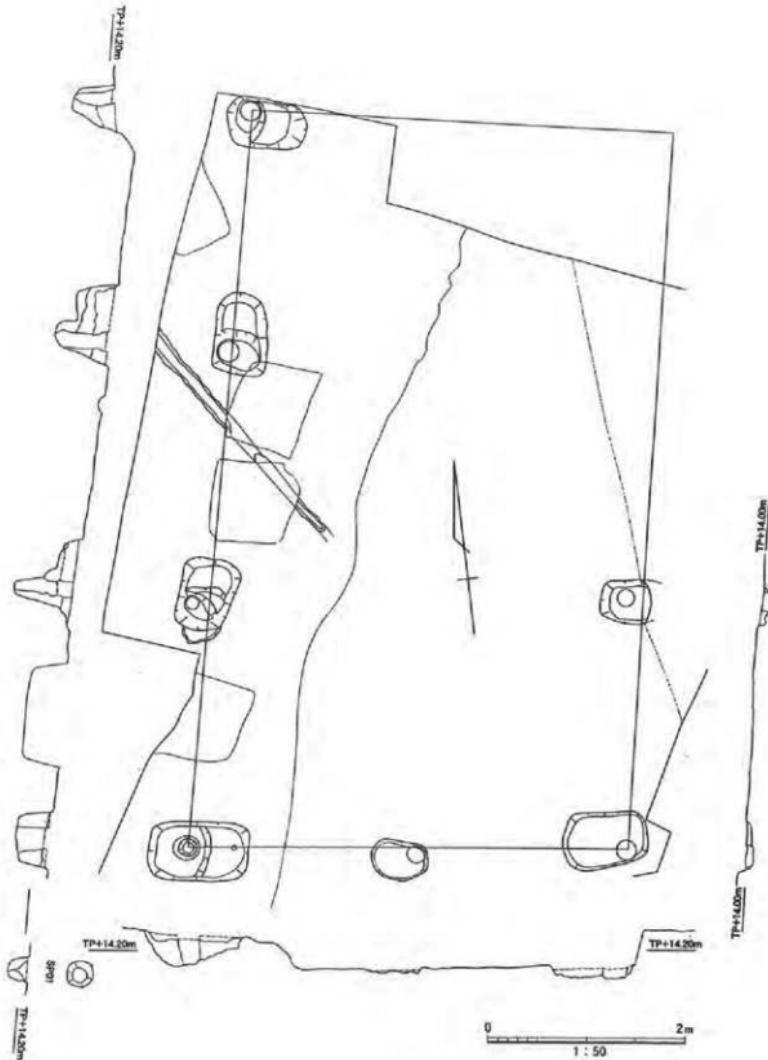


图5 SB01平・断面图

SP01 調査区南西隅にある直径25cm、深さ30cmのピットである。埋土はにぶい黄褐色（2.5Y6／4）粘土質シルトを主体とするが、柱痕跡は確認できなかった。

#### （まとめ）

今回の調査では、狭小な調査面積であったが飛鳥時代の掘立柱建物が検出された。近接する時期の遺構は、古墳時代後期（6世紀中葉）の溝がAS98-2・7次調査で確認されていたが、飛鳥時代の明確な遺構はこれが初例である。もっとも、この遺跡の北東に位置する阿倍寺跡はその出土軒瓦から7世紀中葉に創建されたものと考えられており、この地に飛鳥時代の建物が存在してもおかしくはない。恐らくこの周辺に関連する遺構が拡がっていると予測され、阿倍野筋南遺跡は古墳時代前期の集落としてだけでなく、飛鳥時代の遺跡としても今後注目されるものとなろう。

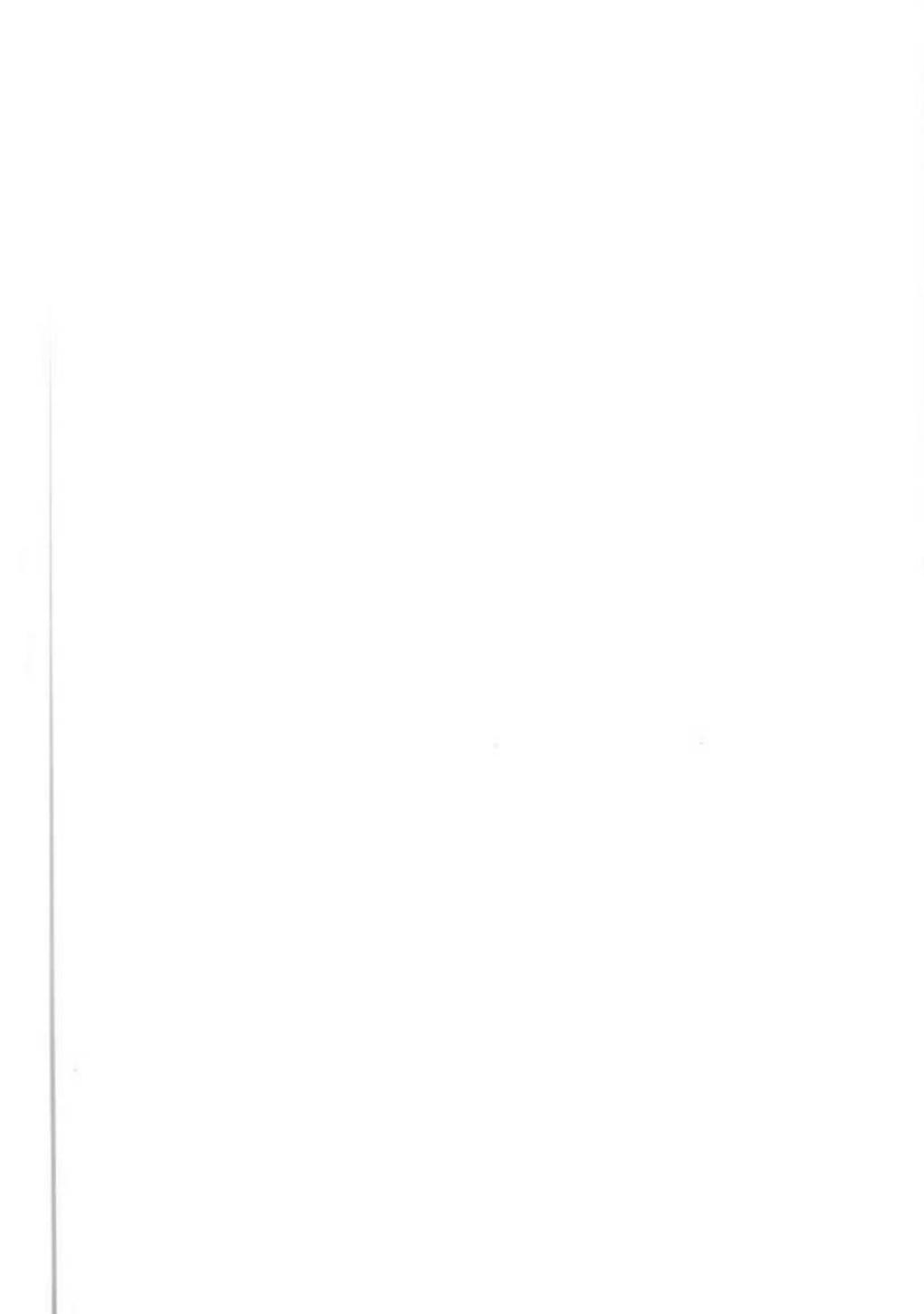
#### 参考文献

大阪市文化財協会1999、『阿倍野筋遺跡発掘調査報告』

調査区全景（南東から）



SB01（西から）



## VII 西 成 区



## 岸ノ里遺跡発掘調査(KS02-3)報告書

- ・調査個所 大阪市西成区天神ノ森2丁目90-18・19
- ・調査面積 84m<sup>2</sup>
- ・調査期間 平成14年11月29日～平成14年12月17日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・高橋工

### 〈調査にいたる経緯と経過〉

岸ノ里遺跡は西成区天神ノ森・岸里東・玉出中・玉出東町にかけて所在し、遺跡の東部は上町台地の西側斜面に、西部は難波累層によって構成される平野部に立地する(図1)。この遺跡が世に知られたのは昭和30年代にさかのばる。旧南海通り一丁目(図1中の※印付近)で民家の井戸を掘削中に縄文時代後期の市来式土器とされる土器片が発見され、出土層位を確認するための発掘調査が実施された。この調査で縄文土器を包含する地層は確認されず、その後も本格的な調査が行われることはなかったが、以後、縄文時代の遺跡として記憶されてきた[前田豊邦1988]。

遺跡内北東部に当たる当該地で建設工事が計画されたため、平成14年8月20日に大阪市教育委員会による試掘調査が行われた。その結果、地表下約1.5mに古墳・飛鳥時代の土器を包含する地層が存在することが確認された。これをうけて教育委員会と事業者が協議を行い、発掘調査を実施することとなった。発掘は前述の包含層を中心に構造・遺物の具体相を明らかにすること目的として行った。この層準の直上までを重機によって除去し、以下は人力によって掘削した。また、上に述べた遺跡発



図1 調査位置図(1:5000)

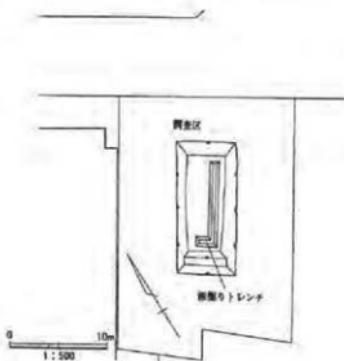


図2 トレンチ配置図(1:500)

見の経緯に鑑み、可能な限り深い地層について考古学的・地質学的な情報を得るため、トレンチ内の東・南壁沿いに深掘りトレンチを設けた(図2)。以下の報告に用いた水準値はTP値であり、指北記号は磁北を示している。

#### 〈調査の結果〉

##### 1. 層序

厚さ30~70cmの現代盛土の下で以下の地層を確認した(図3)。

第1層：オリーブ褐色粗粒砂混り細粒砂からなり、層厚は最大で30cmである。

第2層：暗灰黄色中～細粒砂からなる水成堆積層で、層厚は最大で110cmである。上方に向って細粒化する。部分的にわずかに暗色を呈し、土壤化したと認められる個所がある。

第3層：オリーブ色細粒砂と暗黄色粗粒砂の混合土からなる盛土層で、層厚は最大で15cmである。本層から出土した遺物には、糸切り底の須恵器小型壺底部1(図4)のように古代にさかのぼるものもあるが、ほかに陶磁器片が含まれ、時期は近世に降る。

第4層：灰色粗粒砂混り細粒砂からなり、遺構(SD401・SX401・402)内にのみ堆積する。遺構底部に沿って顯著な鉄分の吸着がみられ、底部は漏水状況下で堆積したものとみられた。須恵器小型壺2(図4)や黒色土器片が含まれ、本層の年代は平安時代に求められる。

第5層は暗色を呈する古土壤である。下位層上面の傾斜を反映して南側で厚く、最大で4層に細分が可能であるが、北側では2層に収斂する。第5層全体としての層厚は南部で約50cm、北部で約30cmである。

第5-1層：暗灰黄色細粒砂からなり、暗色を呈する。層厚は最大で30cmである。南部ではさらに2層に細分することが可能である。

第5-2層：暗灰黄色細～粗粒砂からなる。ラミナが観察でき、層厚は最大で18cmである。SD501などの埋土であり、同遺構を卓越して調査区南部にのみ堆積している。

第5-3層：黄灰色細～粗粒砂からなり、層厚は約20cmである。SD601の埋土であり、同遺構内では粗粒砂のラミナが観察された。

本層から出土した遺物には須恵器TK43型式に属する杯身6・11、TK209型式に属する杯身14・有蓋高杯15、TK217型式に属する杯蓋9・杯身7・12・13などがある。第5層は6世紀後葉から7世紀中葉にかけて堆積したものとみられる。

第6層：暗灰黄色細～粗粒砂からなる水成層、層厚は最大で70cmである。南端部付近でラミナが顯著となる。本層からは、須恵器TK10型式に属する杯蓋17・18、TK209型式に属する杯蓋19・杯身20などが出土したが、19・20はSD601の直下で出土しており、同遺構埋土の砂を振り残した部分から出土した可能性がある。19・20を排除すれば、本層の年代は6世紀中葉に求められる。

第7層：黒色細粒砂混りシルト質粘土で、層厚は約25cmである。須恵器TK23型式に属する杯身21が出土し、本層の年代は5世紀後葉に求められる。

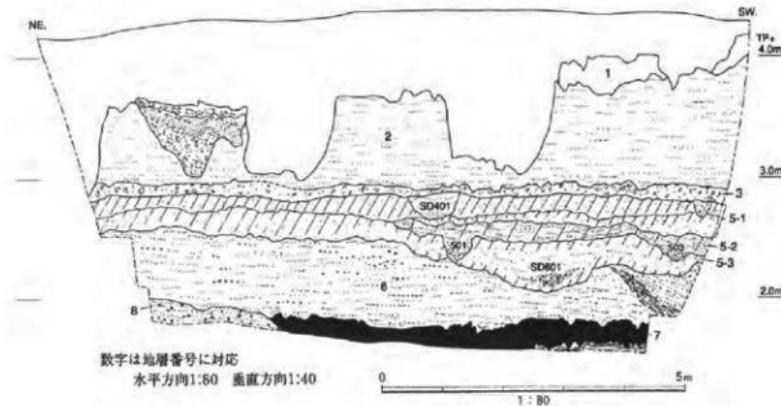
第8層：暗オリーブ色砂疊で層厚は20cm以上である。

## 2. 遺構および遺物

### a. 古墳時代後期～飛鳥時代

第6層上面は南に向って標高を減じており、その比高は約0.3mである。上面で溝・ピット・不整形な落ちこみを検出した(図3)。

SD601 幅1.1～1.4m、検出面からの深さは約0.2mで、ほぼ正東西に延びる。埋土は第5～3層



第4層下面検出遺構

第5層中検出遺構

第6層上面検出遺構

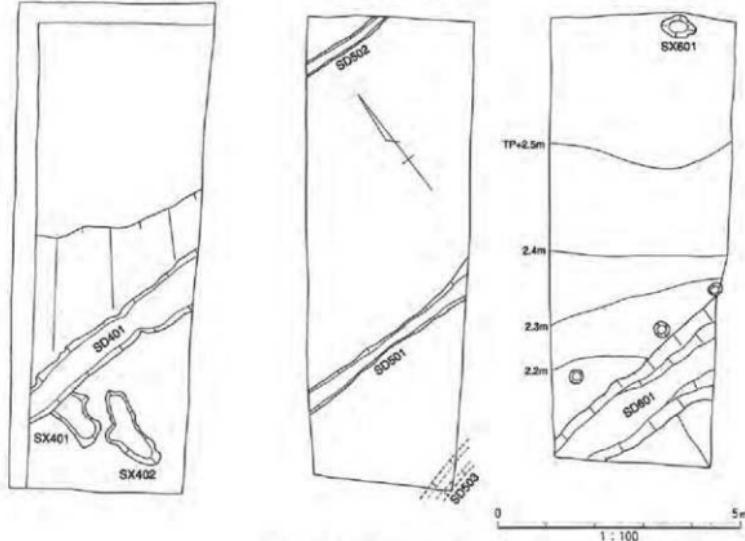


図3 地層断面図・遺構平面図

で、底部付近に流水の痕跡がみられた。埋土からは多くの土器・須恵器片が出土した。土器26(図4)は付け底蓋の鉢の部分である。27は中型の壺である。22~24は須恵器杯および蓋で、TK43~TK209型式に位置付けられる。

小穴群 SD601の北側で小穴が3個検出された。直径0.2~0.3m、深さはいずれも0.1m未溝であった。柱の痕跡は認められず、平面的な配置も建物を構成するようなものではない。

SX601 東西0.7m、南北0.5mで、深さ0.2mの不整形な落込みである。黒褐色中~粗粒砂を埋土とする。付け底窓28が出土した。

第5層中(第5~3層上面)で溝3条を検出した。

SD501~503 幅0.25~0.40m、深さは0.15mで、ほぼ正東西方向に平行して延びる。埋土は第5~2層で、埋土の下部は粗粒砂、上部に向って細粒化する。SD503はトレンチ東南隅の断面観察によって確認した。いずれも時期が判明する遺物は出土しなかった。

#### b. 平安時代

第4層下面で溝・不整形な落込みを検出した。

SD401 幅0.65~0.95m、深さ約0.2mではほぼ正東西方向に延びる。埋土は第4層である。須恵器小型壺2は本遺構検出中に出土した。

SX401~402 SD401の南で検出された不整形な落込みで、深さ0.03~0.05mである。時期が判明する遺物は出土しなかった。

#### 〈まとめ〉

今回の調査では、古墳後期~飛鳥時代の溝、平安時代の溝などを検出したが、その数はさほど多くない。また、住居や井戸跡などの遺構は検出されず、調査地付近は集落の中心部というよりは縁辺部に当ることが想定される。一方、遺物の出土量はコンテナで約10箱であり、調査面積の狭小なことを考えれば多いとみることができる。遺物のはとんどが含まれているのは第5層である。この層中には部分的ながら水流の痕跡が認められることから、遺物は当初からこの地点で廃棄され埋没したとするより、他所から流入したと考えた方がよいであろう。とすれば、それは調査地の東に当る上町台地のより高所から流れてきた可能性が高く、集落の中心もこの方向に存在するものと考えられる。しかし、現在、岸ノ里遺跡の指定範囲は調査地周辺をほぼ北東の限界としており、その範囲について、今後再考する必要があろう。

今回の調査でその核心部を把握した訳ではないが、調査地東方の高所に古墳時代後期から飛鳥時代へ続く集落の存在が想定できた。古代の海岸線が西にさほど隔たらない所に推定され、図4の29~50のような土塹・銷窓が多数出土したことから、漁業はこの集落の重要な生業であったことは間違いないであろう。また、上町台地の南部で古墳時代後期に存続する遺跡があることはすでに[猪山洋1994]で指摘されており、同様な遺跡には山之内・坂坂・遠里小野などがある。同時期は東方の河内平野部で5世紀に最盛期を迎えた遺跡群が衰退・消滅する時期に近く、両者の関係・この現象の背景などが今後の研究課題である。

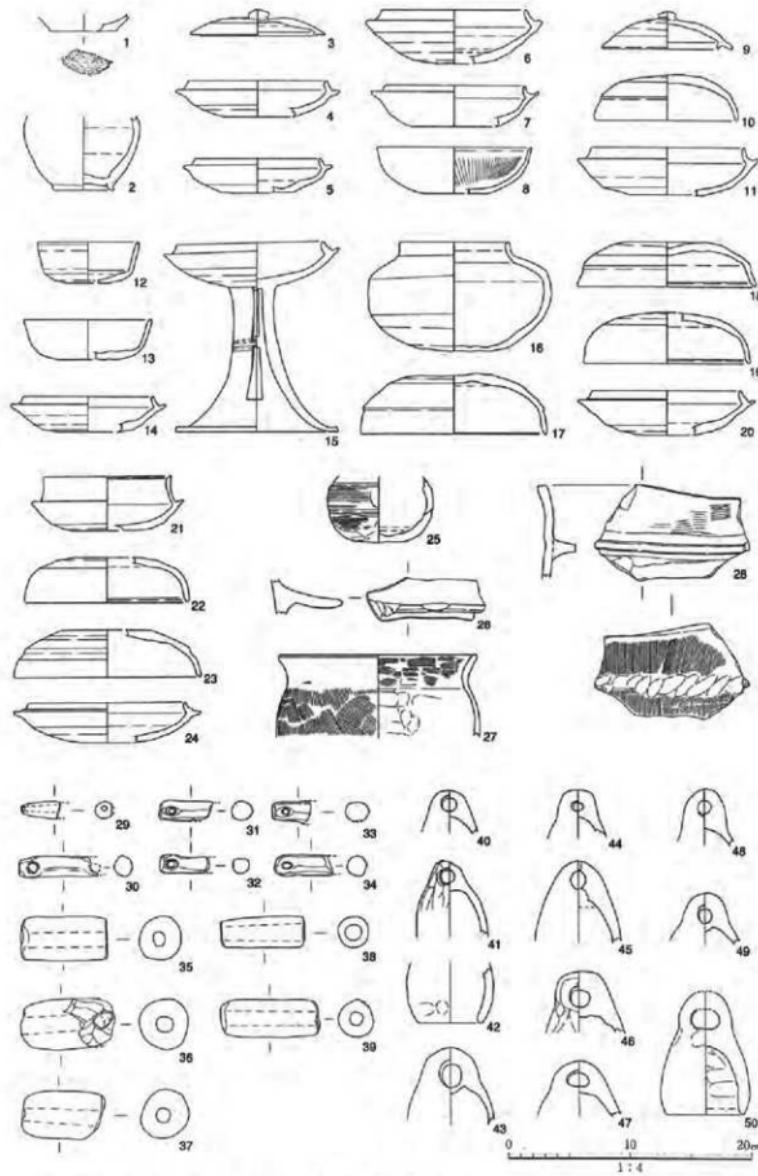


图4 出土遗物实测图

第3层：1、第4层：2~29、第4~5层：3~5、第5层一括：6~35、第5~1层：7~8·30~31·40~41  
第5~2层：9~11·42、第5~3层：12~15·32·36~38·43~45、第5~6层：39、第6层：17~20·33~50  
第7层：21、SD601：22~27·34·46~49、SX601：28

市来式縄文土器出土時の事情は文献でも不鮮明であるので、今回の調査は事実上初めての正式な発掘調査といえる。したがって、できるだけ多くの地層についての情報収集に努め、地下約3mで古墳時代中期の遺物を含む地層を確認し、さらに下層に遺物包含層が存在する可能性が考えられた。一方、縄文時代にさかのほる地層については、依然として確認できていない状況に変わりはない。いずれにせよ、遺跡全体の層序や古地形と人間の営みとの関係を復元する仕事は、今後の調査件数の増加を待つて行いたい。

#### 参考文献

- 前田豊邦1988、「市城の縄文遺跡」：『新修 大阪市史』第1巻  
積山洋1994、「上町台地の南と北」：財団法人大阪市文化財協会『大阪市文化財論集』

東壁南部地層断面  
(西から)



第6層上面検出  
遺構全景  
(南から)



第5層中検出  
SD501  
(東から)





---

平成14年度 大阪市内埋蔵文化財  
包 藏 地 発 掘 調 査 報 告 書

発行日 平成16年3月31日

発 行 大 阪 市 教 育 委 員 会  
備 大 阪 市 文 化 财 協 会

編 集 大阪市教育委員会文化財保護課  
(大阪市北区中之島1-3-20)

印 刷 一 心 堂 印 刷 株 式 会 社

---

